

# 参加者側からの コミケット

—— サークル・コスプレ・設営・企業 ——

コミケットの内実を決めるのは参加者である。  
コミケット参加サークルの歴史はそのまま同人誌の歴史でもあり、  
そこで生み出された作品、本そのものが  
コミケットの生み出したものでもある。  
時代毎に変化していく同人誌、その記憶は参加者の中にあり、  
一つの時代の風景でもあるのだろう。  
コミケの花とも言われるコスプレイヤー、設営を手伝ってくれる常連、  
そしてもっとも新しい参加形態である企業。  
それらの変遷をここではたどる。

- Q1.同人誌を知ったのはいつ? どうやって?
- Q2.初めて同人誌を作ったのはいつ? その時の感想は?
- Q3.コミケットを知ったのはいつ頃? どうやって知りましたか?
- Q4.コミケットに初めて来たのはいつ? その時の感想は?
- Q5.ペンネームとサークル名の由来は?
- Q6.今までのジャンル遍歴は?
- Q7.これまでの商業ベースでの活動暦を教えてください。
- Q8.最近の同人活動について教えてください。

## 高口里純

当時のペンネーム/  
イ・S士門

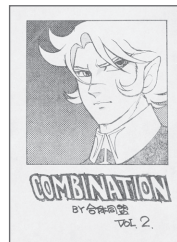
当時のサークル名/  
風変わりな詩人たち  
(Pot)



A1.中学生の頃だったような…。漫画誌の会員募集記事。  
A2.当時は作り手ではなく描き手だった。参加サークル「Pot」「SM倶楽部」「JUM2(ジャム・セカンド)」など。  
A3.覚えてない…。  
A4.第1回開催の時。地味だった。大学の漫画サークルがほとんどだったせい? 創作系少女漫画サークルは二つくらいあったかな?  
A5.直感…。意味ないっつーか…。こういうP.N.をつけたがる年頃とゆーか…。  
A6.創作系少女漫画→ロック系→耽美系→引退→復活後 銀英伝や魔王伝(パロディ)とか節操なし→イニシャルD→め組の大吾→創作系に戻り商業誌発表作品のサイドストーリーを展開中…。  
A7.白泉社でデビュー。その後えらいもめて(ウソ)フリーになり場所を選ばず描いています。講談社、角川書店、徳間書店、祥伝社、芳文社などなど。  
A8.「悪態」(あくたい)にて創作オリジナルやっています……。

## 竹田やよい

当時のサークル名/  
薔薇十字団



A1.高校の同級生にマン研(少女マンガ系のプロ育成のマンガ研究会)に入ってる子がいて、彼女に教えてもらいました。A2.自分で編集したのは当時入会したサークル(薔薇十字団)の代表を引き継いで、会誌を。少女漫画系オリジナル誌(イラストとエッセイ中心)ま、いわゆる耽美系ってやつです。楽しかった。それだけ。A3.当時よくハガキイラストを投稿していた音楽雑誌(MUSIC LIFE)の常連仲間に「こういうマンガのイベントがあるよ」と言われました。彼女は友人に聞いたようです。A4.一般参加は1回目から。新鮮で面白かったです…が、どっかかっていうと評論系が多くて少女漫画好きとしては物足りませんでした。A5.P.N.はずっと本名。現在のジャンルでは好きなタレントさんにちなんだ名前にしてます。サークル名は初代の代表者が考えました(中世の神秘主義的秘密結社の名前から)。A6.オリジナル(耽美)→アニパロ→オリジナル(JUNE)→芸能。A7.デザイナー→フリーのマンガ家→なんでも屋。A8.芸能です。

## 浪花愛

当時のサークル名/  
ポルテスV FC  
「ファルコン」



A1.高校1年の時、見学に言った某アニメスタジオで他の見学者の方が作っていた本を拝見し、その年の冬、第1回コミックマーケットに一般参加しました。A2.高校漫研の会誌で高校2年。自サークルの発行物は短大1年。FCの会誌という形でした。A3.高校2年の冬に新聞広告(?)で拝見しました(記事ではなく広告)。今では考えられない…のでしょうか? A4.高校2年(何回もすみません)…書ききれない程の感想が(笑)。A5.サークル名はそのまんま。ペンネームは、「ポルテスV」と前作の「コンパトラV」から…。A6.ポルテスVFC→ガンダム(同人としてはあまりやりませんでした)→いろいろアニメ(モスビータとかボトムズとかもう本気色々)→J9シリーズ→ルパン三世(ここは兼業)→キャプテン翼→ブレイクショット→ワタル→スーパービクターマン→YVIBA→忍たま乱太郎→アンジェリーク→ポップンミュージック→アイシールド21→武装錬金(現在)。サークルベースとしてはアンジェリークが創作で取っています。なお、ひとつの作品にハマっている時も前の作品のファンは継続しているの、いつものものすごいサークルです。A7.月刊OUT及びアニパロコミックスに代表されるみりり書房さんの一連。芳文社さんの四コマ誌、竹書房さんの四コマ誌。あおば出版さんの動物カワイイな一冊ぐらいでしょうか…。A8.実録子供と動物本を出しつつアンジェリークと忍たま本等を出しています。ええ、まだやっています。

## 堀内満里子

当時のサークル名/  
高校の  
漫画研究部



A1.高校のまん研仲間がまんが大会だかまんがフェスティバルで買って来た物を見せてもらった。  
A2.高校のまん研では肉筆誌と、そのコピー誌を1冊製本屋さんにハードカバーで製本にしてもらって、保管。  
A3.第1回開催のお知らせを少女コミック誌上で。  
A4.第1回。同人誌は割り高なので何も買わなかったが、まんがを好きな人、描いている人たちが集まっていたうれしかった。規模はこんなものだと思っていた。  
A5.(空欄)  
A6.高校のまん研から派生した「まん研Why…?」。創作系コミケットで友だちになった人たちに誘われている。参加。「TO From」「楽書館」「漫画の手帖」「をとめBOOK」など。一時京極夏彦サークル「京極道」。  
A7.マイナーな青年劇画系他。  
A8.「楽書館」「漫画の手帖」「をとめBOOK」など。

## 少女漫画とロックの時代

米沢 一番最初にコミケに参加されたのは竹田さんになるのでしょうか。

竹田 一般参加ですけどね。

堀野 私は「ポルの一族」を見に行っただんですが(全員笑)。

浪花 私は新聞の広告欄に、板橋区で漫画の催し物があるというのを見て一人でブラッと行っただけです。

堀野 1回目って、お茶飲むようなところがありましたよね。

米沢 ありました。2回目くらいまで。

浪花 私は漫画の催し物だっただけで行ったので、目的の本やサークルがあったわけじゃないんですが、青焼きコピーの同人誌とかいっぱい買って帰りました。(笑)

堀内 私も少女コミックの広告で見て、漫研の友達と二人で午後からコミケに寄っただけです。

竹田 私は、当時「MUSIC LIFE」っていう雑誌の読者で、今でいう葉書職人みたいな常連が何人かいて、その常連仲間の人から「今度こういう漫画のイベントがあるよ」って言われて行っただけです。

高口 私はPotで当時非常にペーペーだったんですが(笑)。薔薇十字団(RoseCross)とPotがたまたま同じ日にお茶会

をやっていたことがあって。Potでやってるのにお茶会にならないんですよ。みんな覗きに行ったりサインもらったり(笑)。そこにみかみなちさんとかも居たし。私にとって当時はやよいちゃんとかはすごいスターだったんで。

竹田 と、とんでもないです。

(一同笑)

高口 当時、QUEENとかRoseCrossとかには、恐れ多くとても近づけなかったんで。

米沢 QUEENは少女漫画のアシスタントの方たちが中心のサークルだったのかな。

浪花 ああ、セレブでしたね(笑)

竹田 QUEENは割とプロになるって明確な意識があったし。純然たる耽美系とはちょっと一線を画してましたね。

高口 耽美的なものも脇では好きだけど、プロになるためにはちゃんとメジャーになるためのノウハウみたいなものを身につけていなければならないっていう。

竹田 趣味は趣味、プロになるためのノウハウは別、みた

### 用語解説

#### ■ポルの一族

迷宮(批評集団)の評論誌『漫画新批評体系』第1期に置いて連載されたバックキー・アロー作による「ポルの一族」(萩尾望都)のパロディ。1エピソードを1~2Pの中に構成し、単発ギャグをつめ込んだスタイルは、初期同人誌パロディに大きな影響を与えただけではなく、ギャグ漫画にも少なからず受け継がれていった。発表されるや話題となり、75~76年にかけて、ファンの間で密かなブームを呼んでいたパロディ漫画である。

#### ■QUEEN

73年にスタートした少女漫画創作マン研。人気作家のアシスタントやデビューをひかえた描き手達が多く、プロ指向の内容は当時質の高い誌面を作っており。人気実力共に一級の同人誌だった。またプロ作家のゲスト作品も掲載され、それも人気の一つだった。芳村梨絵、みかみなち、石真琴など多くのプロがここから出て行った。

#### ■T-REX

60年代末ギターのマーク・ボランとボンゴのミッキー・フィンのユニット。ティラノサウルス・レックスとしてデビュー。72年マーク・ボランを中心としたエレクトリックブギのロックバンドとなり「21世紀少年ボーイ」「メタルグルー」などヒット曲を連発、化粧やラメ入りのコスチュームなどグラマラスなファッションによって「グラムロック」「グリッター」の代表となる。中性的なイメージもあって、少女まんがファンには人気が高く、自らボランと名乗る芳村梨絵(QUEEN)などもいた。マーク・ボランは77年に死亡、バンドは解散した。ちなみに浦沢直樹の「21世紀少年」はこのバンドの曲からの引用。日本のロックバンド頭脳警察も初期は影響を受けている。

#### ■デビッド・ボウイ

60年代末ポップシンガー、パフォーマーとしてイギリスでデビュー。73年に発表した「スペースオデッセイ」で中性的な人間を越えた宇宙の子のパフォーマンスとその音楽性によって注目を集める。以後、「ダイヤモンドの犬」など多くのアルバムを発表する一方、映画「地球に落ちてきた男」「戦場のメリークリスマス」などでは役者としても活躍する。イギリス的なムード、中性的なイメージ、グラムを経て変容していくファッションを含め、ロックを体現する存在として人気が高い。70年代、少女漫画においてデビッド・ボウイは、アンドロギュヌスのアイコンとして、様々な作品に登場している。

#### ■「ガッチャマン」

「科学忍者隊ガッチャマン」。72年10月~74年9月放映のタツノコプロ制作のTVアニメ。コンドルのジョーと主人公大鷲のケンとの関係に多くの同人誌が作られ、山藍紫姫子などが活躍した。

いな、その分け方がちょっと、当時私は納得いかなかったんですよ。(笑)

**高口** 私はもともと、一応プロ志願だと言ってたんですよ。みんなには「えー」とか言われてましたが(笑)。

**米沢** 少女漫画サークルは、ロック系のファッションの方が結構多かったし、美形もロックから来てる感じだったし、洋楽と漫画がくっついてた時代でしたよね。

**竹田** それまで割とロックって男のものだったじゃないですか。それがあの頃QUEENとか、今で言うビジュアル系のバンドが出てきて、初めて少女漫画の王子さまが具現化されて、しかも外人じゃないですか。理想の王子様像が目の前に現れてきてみんなキャーって行ったんじゃないですかね。

**高口** 金髪碧眼って女の子はやっぱり好きじゃないですか。T・レックスとかも割に公然と「マーク(・ボラン)とミッキー(・フィン)がそういう仲なんだよー」みたいなのを、全面に出してたりしてたんですよ。で、私たちが中学の頃に萩尾先生とかの漫画にちょこちょこ出てきたやおい要素みたいなものが身に付いてたところに、そういうリアルなものがドーン！と来るから、それが一緒になっちゃって。

**竹田** 男に対するセクシーな見方というものを具体的に押し出してきたのがそういうビジュアル系のロックだったんですよ。それ以来「少女漫画の中に出てくる男性像」ってものがガラッと変わりましたよね。

**竹田** ナマ物(笑)。24年組の作家の人たちはみんなデヴィッド・ボウイとか大好きで、それを作品の中に描き始めて、少女漫画とロックバンドが一体化した時代でしたね。

**米沢** そうするとやっぱり中心になったのはグラムロックからQUEENに至るまでの美形イギリス系バンドみたいな感じ？

**竹田** そう、絶対イギリス。

**米沢** 音楽の場合、あっという間にQUEENの時代からパンクが出てきちゃうでしょう。77年くらいから。

**竹田** でも、かわいいじゃないですか。ビジュアルがね、おなじ島国のせいかイギリスってかわいい。それでいて少女漫画チック。決して日本人じゃないの。日本人サイズじゃない。外人じゃなきゃいけないっていう(笑)。

**米沢** 最近は、コミケットでは洋楽サークルはかなり減っているんですよ。

**竹田** 今は聞き方が変わって来たじゃないですか。情報が多くて、妄想するものがなくなりつつあるんだよね。

**高口** 歳のせいかねー、今は、横文字の名前だと萎えちゃうんですよー(笑)。もっとリアルなのがいいと思うと日本人になっちゃう(笑)。

## 耽美とアニパロ

**米沢** 音楽以外というのは、どうだったんでしょうね？

**浪花** あとはやっぱりアニメ系じゃないんですか？私自身がアニメの人間だったんで…。「基本的に自分は作風が耽美とは違うところを目指している」と思って(笑)。

**堀内** 創作系の少女漫画や耽美系やってた人たちの中にも、サンライズのアニメで、なんとなく流れが出来てくるわけですよ。

**浪花** 創作少女漫研の会誌にも、フリートークページとかがあって「今自分がはまってるもの」とかって書いてあったりするじゃないですか。そのなかに「キャシャーン」とか描いてあると、むさぼるように読んだ覚えがあるんですよ。「あ、こんな所に「ガッチャマン」が！」とか一生懸命漫研雑誌の隅をつついていました。

**竹田** 同人誌で楽しいのは、本音のおしゃべりトークみたいなのがちょこちょこ入ってるところですよ。

**米沢** ライブ感覚というか、商業誌ではいえないことが書いてあるっていう…。

**浪花** 昔、漫研というのは「プロになるんだ」みたいなところで切磋琢磨していた感じじゃないですか。

**高口** 創作系少女漫画にいった人はみんなどこかで漫画家になりたいっていうのがあったんですよ。だから同人誌やそういう感覚っていうものも「デビューするまで」、みたいな。

**浪花** 私はその次の世代で、創作じゃなくて交流を中心に置いた活動をするという感じです。

**竹田** 商業誌を読んでいて、今で言う「萌え」っていう感情をどこにぶつけるかっていっても、ぶつける所がなかったわけ。ジュネっばい漫画であれ、そうでない少年漫画であれ、何かを見つけて、「実はこれが好きなのよ〜」っていうのは、何かを表現しようということの一番単純な動機になりますね。自分の「作品」を発表するというのとは

別の何か創造、表現。

**米沢** 妄想と萌え…。

**高口** の初期症状みたいなものがパロディじゃないかと。

**竹田** それはだいぶ後になってから(笑)、わかるようになったんですけどね。なるほど、こうやってパロディって楽しむのね！っていう(笑)。

**米沢** 合体同盟あたりがやっぱり…。

**竹田** 昔少女漫画でオリジナルやってた人は、アニメなんて別世界だったの。アニメ好きはアニメ好きでいて、少女漫画好きは少女漫画好きでいて、お互い美意識が相容れなかったんですよ。少女漫画好きの特に耽美系は、アニメなんてダサいって思いこみがすごく強くて、またちょうどその時アニメが段々変わってきたじゃない？

**高口** 美形悪役っていうのが出てきちゃって、これは耽美系としては無視できないと(笑)。

**竹田** はじめはすごく抵抗があって「こういうアニメがかっこいいんだよ」と言ってた人も、みんなやっぱり「えー、アニメでしょ」って全然相手にされなかったんだけど、少しづつ同志を募って行って、少女漫画サイドから見たよこしまなアニメ、みたいな感じで始まったのが合体同盟でしたね。

**米沢** するとやっぱり美形悪役のいるサンライズ系ですか。

**竹田** サンライズ系の、「ポルテスV」あたりからですね。「ダイモス」は、リヒテルが見るからにアレだったから…羽があったり(一同笑)。なんかビジュアル系で。

## 初期のサークル事情

**米沢** 初期の頃の創作系の少女漫画ってのはどんな感じだったのか、どんな感じでコミケットとか同人誌活動を楽しんでたんでしょう。

**高口** 私はねー、皆で駆けつけて、編集するのがものすごく面白かったから。

**堀野** すごい溜まり場になってました。皆そこからバイトや会社に行って、「ただいま」って帰って来て、編集とか原稿書いたりして、2~3時間寝て、またバイト行って…、みんなで作って、みんなで売ろう、みたいなところが楽しかったんですよ。でも今考えたらすごい錚々たるメンバーが、今は第一線で活躍してるような方が、すごいたく

さんいて、凄かった……けど、200部くらいしか売れなかった(笑)。

**米沢** 参加者自体が2000人ぐらいのコミケットの中で200っていうのは凄いいよね(笑)。

**竹田** 私は、あんまりがんばり屋じゃないもんで、作品を描くってことが出来なかったんですよ。当時画期的だったのはRoseCrossってイラストだけでも参加できたんですよ。

**米沢** 女子大漫研はどうでした？その頃は女子高漫研かな？

**堀内** ウチの女子高漫研は付属だから受験がないので、3年生でも遊んでたんだけど、全校生徒が1100人で、100人が漫研部員だったんですよ。中核にいるのは十数人なんですけど。

**米沢** ちょうど女子大漫研ブームだった時だよ。 「やはるー」とか、「びびっと」とか。

**浪花** 実は同じ漫研の中で、少女漫画系と映像系って二派に結構分かれてて…、オタクの数が少ないから仲が悪くても交流はメチャクチャあったんですけど、お互い一歩も譲らなかつたですね(笑)。

**竹田** 私当時少女漫画好きがベースにあったのに、アニメに魅力を感じだしたのは、少女漫画にもない、少年漫画にもない、独特の色気というか、エロティックなものを感じちゃったんですね。新しい何かを。

**米沢** 合体同盟って、列が出来たサークルとしては比較的初期でしょう。

**高口** だって、創作系やってた私を買っちゃうんだから(笑)

**竹田** 当時私、RoseCrossでやってたんで、やっぱりこっちもやりながらアニパロもやってると、響き買ってたわけですよ。

**堀野** 私凄いいショックでしたもん、やよいさんがアニメに行っちゃったと思って(笑)。

**竹田** 今よりも全然ストイックな世界だったじゃないですか。「アニメはよくないものだ」みたいな(笑)。そういう変な思い込みがあって、はっきり棲み分けしなきゃいけないっていう、鑄型にはめるみたいなことがあって。

**米沢** こんな狭い世界でねえ(笑)。

**竹田** 両方やってると響き買いうえに、二つもやってるなんて当時では考えられないことだったから。

**米沢** それで創作漫研の人たちも合体同盟を買いに行っただってっていうのは？

行ってたっていうのは？

**高口** あのね、過激だったから。エロが(笑)。まだ創作系でも、そんなに激しくなかったよね、昔は。そんなにあからさまなものは…あからさまって言い方はないか(笑)。

**米沢** それでファンクラブ系の印象は？

**浪花** 同人誌も、感想と意見が中心だった中でパロディだけを一冊の本にまとめて、あまつさえそれがちょっと女の子の憧れの世界だったりするものだったから、もう、それはそれは(笑)。

**米沢** 憧れの世界って、よくわかんないんですけど(笑)。

**浪花** 漫画として完結してるんですよ。そのころ、ファンクラブ誌に投稿していいっていうのは一枚イラストかくすぐり程度で。それが、ちゃんと漫画として成立していて、しかもちょっとアブナイ世界に突入したらもうそれは夢中になってしまう。

**堀内** そうですね、合体同盟の場合はもともと少女系で培ったレベルみたいなのがあるわけで、それとアニメとがくっついたから、すごくハイレベルに見えましたよね。

**竹田** 当時のテレビアニメってストーリー性が弱かったですよね、そこに少女漫画のストーリー…物語のノウハウが入って掘り下げていったわけで。

## あの頃の本作り

**米沢** 当時印刷所も今みたいに沢山ない時代で、本作りのハードルが高い時代でしたよね。当時の状況がわかるような話がありますか。

**高口** なるべくベタは使わないでねとか言われた(笑)。

**米沢** 断ち切りも難しい。

**竹田** 漫画同人誌のノウハウというのを、印刷屋さんもあんまり持ってなかった。コピー誌を作るにしても、白黒コピーがすごく高かった。

**浪花** トレベに書いて…。

**米沢** それは第二原図(笑)。

**竹田** あと学校の謄写ファクスがあって、謄写版みたいなのを…。

**米沢** 部数ってのもある程度見込んでの量を刷るようになりますか？

**高口** 最初、50とか持っていったら、売れていっちゃっ

たんで、慌てて会長さんが自宅に戻ってまた取りにいった(笑)。なるべく持ち帰ったりしないで売り切れ狙い。

**堀野** そのうちイベントで売る数は最初から頭に入れて、作るようになりましたね。

**高口** だから完売すると「完売だー！」とかやって…。

**堀野** 本の値段を何部刷って全部売れて、そのかかる経費がこれだけっていうのを元に、トントンになるような価格設定をしてたから、儲かるってことはないですね。

**堀野** あとサークルさん同志でも同じような嗜好の方とかだとすぐ仲よくなって、「一緒に合同誌を作ろう」とか、そういうふうに輪が広がっていったりしました。

**竹田** 川崎市民プラザ、あの会場の頃まで全サークルチェックして回ってました。見るもの全てが楽しかった！ワタシみたいにアニメも少女漫画も全部いけちゃう人間にしてみたら素晴らしいお祭りでした。

**浪花** 私が参加したのは77年ですね。「ボルテスVファンクラブファルコン」というあからさまな名前のサークルで(笑)。わざわざ制作会社に行って「すいませんがこういう活動を始めますんでよろしくお願いします」って頭を下げて帰ってくるっていう時代ですね。

**堀内** コミケ前ですけど、あの頃はアニメの制作会社も結構見学させていただきましたよ。

**浪花** こういう話をするのに長浜忠夫さんっていう監督のことを外しては語れないんですけど、その方が本当にいい人で、「こういう事をやりたいんですけど」って言うとき「ああ、いいよいいよ」って色々(スタジオの中を)案内してくれたり、(スタッフを)紹介してくれたり、話をしてくれたりした方だったんです。今では考えられないんですけど、当時は公認ファンクラブってものも出来て。

**堀内** 70年代半ばの頃ですね。スタジオに行くときセルをくれたりね。

**堀野** 1回目のコミケに行ってQUEENの会員になって、2回目ではもう自分で(サークルを)出していたんです。

**米沢** 読者として参加していた人が次回はもう作っている、という。

**高口** そう、意外とそのサイクルが早かったですね。面白かったんですよー。

**浪花** コミケっていう「場」ができたから、っていうのもあると思うんですね。4回目に行ってみた時に、「もうコミケットも定着したな」っていう感じになっていて。

**堀野** もうそれに合わせて本を発行する、みたいな感じになって。

**竹田** 最初は「イベントに合わせて本を作るなんてえげつない」みたいな風潮があったんですけどね。マーケットっていう人目にさらされる場を得て、「企業努力」じゃないですけどもっと見栄えのいい、「会員じゃない一般の人が手に取ってくれる」「一見さんの足を止める」っていう風に気持ちが働く部分はありましたね。

**高口** 無理やり止めてたけど(笑)。

**竹田** やっぱり「買って欲しい」っていう気持ちは基本じゃないですか。それで綺麗な本を作ろうとするし、だんだん努力もするし、「綺麗な印刷所ってどこだろうね」って話になるし。

## 商業誌の状況とコミケの変化

**米沢** 浪花さんは「アニメパロディ漫画」ですよ。そういう商業作家ってそれまではあまりいなかったと思うんですけど。

**浪花** 私の場合、作品が好きだっていう気持ちを発露する場が、たまたま商業誌に存在していたに過ぎないという気持ちがあったので、それで食べていこうとは思っていなかったし、将来があるとも思っていなかったので、普通のOLとして就職してから兼業でやっていたから…。

**米沢** あの頃やぎさわ梨穂さんと岩崎さんとで「アニメパロディの御三家」みたいな感じでしたが、同人やっている人たちってどうだったんでしょうね。「こんなのも商業誌でやっていいのか」という思いは…。

**浪花** 絶対そう思っていましたよね(笑)。

**竹田** 当然の成り行きかなって気はしましたけど。だってニーズはあるわけでしょう。

**浪花** ホモは商業誌に載りませんでしたから！それだけは「読みたかったら同人誌」っていう暗黙の棲み分けができてましたね(笑)。せいぜいギャグでくすぐるくらいで。あくまでも冗談ですから、っていう昔風の発想ですね。

**高口** 商業誌はやおいどころか男女のセックスシーンもダメっ。

**竹田** 少年漫画っぽいのもダメだった。あとあからさまにSFっぽいのもダメでしたね。

### 用語解説

#### ■やっほーっ

75年に創刊された東京女子大マン研の会誌。センス良くぶ厚いだけでなく、森川久美の本格派少女漫画、パロディの愛川真理などがあり、女子大マン研会誌の中では人気が高かった本だ。現在でも同タイトルで出続けている。当時人気を集めた女子大マン研会誌にはお茶の水女子大マン研の「ぼるぼら」(湯田伸子、柴門ふみ)、実践女子大マン研の「エロイカ」(さべあのみ)などがあった。

#### ■びびっと

76年創刊の日本女子大マン研の会誌。ここからは高橋留美子、目白花子などがプロになっていくことになる。1～5号には高橋留美子がけもこびるの名で作品を描いていることもあって、男性ファンの留美子人気高かった80年代前半には、漫画古書店でかなりの値段で取引されていた。

#### ■第二原図

機械が手軽な価格ということもあって73～78年頃、漫画同人誌界に普及した「青焼きコピー」とも呼ばれる「湿式コピー機」は、光を透過するフィルムと印画紙を重ねて機械を通し、焼きつけ定着させる方式だった。そのフィルムは、漫画の場合、原稿をトレベにコピーしたような「第二原図」が用いられた。直接トレベに原稿を描くケース多かったが、修正がきかないこともあって、第二原図を製作して、コピーに当たる方がよかった。

#### ■謄写版

戦前からある手書き孔版による印刷形態で、ガリ版とも呼ばれる。50～300部ぐらいの少数数印刷が手軽に出来ることから、学校のプリントなどにも使われ、文芸同人誌や個人誌、通信誌など、ミニメディアの印刷の主流だった。50～60年の漫画同人誌は作品の肉筆回覧誌(原稿を製本したもの)、謄写版の会誌、通信誌というのが普通である。また美術孔版と呼ばれる、色刷り、重ね刷りなどテクニックを駆使した印刷は、手作りアートの一分野にもなっており、漫画同人誌でも一時期小ブームを呼んだ。

#### ■やぎさわ梨穂

「ガンダム」を中心とした「戦場で…?」等のパロディが有名。C翼・星矢でもたいに☆ウイすばアのサークル名で活躍。

#### ■岩崎

「MY HOME ギジェ」などの「伝説神イデオ」パロディが有名。近年は霊能者としての活動も。

#### ■シャア猫のこと。

商業誌などで描かれていた、浪花愛の漫画における代表的キャラクターとして知られている。「ガンダム」のシャアを猫的キャラクター、2頭身にしたもので、そのかわいさマスクット性が人気を呼んだ。「OUT」の他、あちこちで見かけた覚えがある。

#### ■JET

ブライガーFC YEAH!を主催、精力的に分厚い同人誌を発行。商業誌では、歴史モノやミステリーモノを中心に活動、「オペラ座の怪人」や横溝正史作品の漫画化を精力的に行っている。

**高口** 大御所の竹宮先生や萩尾先生なら良かったけれど、新人がそういうものをやるのは厳しかった。

**竹田** 「これ描いたらデビューできない五大要素」みたいなものがある。私達の頃は商業ベースにのせるために「学園ものを描け」って言われてたくらいで。好きなものは描けないのが当たり前だったんですよ。

**高口** でも私自身は「プロになったからには何でも描く」という気があって、自分が描きたいものは同人で描けばいいや、と思ってたんです。ところが商業誌の方でもそういうものを描けるようになって来たんで、それがきっかけでズルズルズルッと(同人を)抜けるようになってしまったんですよ。それもなるべく同人でしか描けないものを厳選して描いていまして。「それでもどこかに(商業誌では描けない)タブーはあるんじゃないか」ってタブーを探してみましたね(笑)。

**高口** 同人に戻ってきたのは「銀英伝」ですね。最初の劇場版を見たらハマっちゃったんですよ。で、「同人誌もありますよ」って言うから「えっ！見たい！」って(笑)。そうしたら、持って来た同人誌がフルカラーなんですよ！「えっ何これ！同人誌！？」って。私そのあいだ全然知らないから浦島太郎みたいで、「何が主流なの？」なんて事を聞いたりして。だって「受け×攻め」ってのも知らなかったんですよ。

**米沢** 10年近いブランクは大きかったんですね。

**堀野** 初めの頃のコミケは警備の人なんていなかったじゃないですか。私も10年ぶりくらいに友達に連れられてコミケ会場に行った時、警備の人を見てポカーンとしてたら、友達に「あれはね、コスプレじゃないんだよ」って言われて「エーッ、本物の警備が入ってるんだ！」って凄くびっくりして。

**竹田** だって初期なんてオフセットっていうだけで「まあ凄い」みたいな感じだったのに、「フルカラー～っ！？」なんて。

**米沢** それまではオフセット本の表紙は色上質に黒インクってのが基本でしたね。

**高口** だからコミケに戻ったのがたぶん88年か87年。ブランクが8年くらいあるから、「で、ど、どうやって作るの？」って言うと、当時キャブ翼とかやってた子がいきなりそういう本を持ってきて、「今はアレがコレでこうでっ！」何言ってるかさっぱり分かりませーん！。「健小次で一、

小次健でっ！」、わかんないっ！みたいな(笑)。

## JUNEの時代から キャブ翼へ

**米沢** 竹田さんは少女創作同人が衰えていく状況を見てどう考えていました？

**竹田** 結局「JUNE」っていう少女漫画耽美同人の受け皿が商業誌に出来てしまっていたじゃないですか。

**高口** だから私はそれを見た時に、「(こんなものが出てきちゃ)コミケなんて無くなるよ！」って思ったんだもん！そしたら後で見た時に(コミケが)かえてって巨大になってたんで、それでビックリしたんですよ。

**竹田** 「JUNE」っていう受け皿が出来て、「書店で置いてある本に描きたい」って考える人は「JUNE」に投稿するようになったんです。だからいろんな人が「JUNE」から輩出されたし、私も付かず離れずで漫画描いたりして。

**高口** わたしも描きなよって話をもらって「描く描く！」って言ったのに、白泉社にバレちゃって「ダメっ！！」って言われて。ネームまで切ったのに「ゴメン」ってことになって(一同笑)。

**竹田** 「JUNE」って嫌われる反面、憧れの的でもあったわけですよ。 「JUNE」に載るのが夢という人も随分いたんじゃないですか？漫画だけじゃなくて、“JUNE”っていうくくりで色々なジャンルの方向を示してくれて。あれを読んでも納得できましたね。

**米沢** 求めているものが全て詰まっている、っていうのはどうなのでしょう。自分から探す楽しみっていうのは…。

**竹田** 段々なくなりましたよ。自分で探さなくても与えられる、紹介してくれるっていう媒体が出来てしまっ。やっぱりこう、簡単に手に入っちゃうと、段々興味がなくなってくる。人にもよるんですけど、私は結構「荒野」に出ていって探すのが好きだったんで、それでアニパロに走るようになって。

**高口** だから、「竹田さんはまだ(同人活動を)やってるよー」って人に言われて、「何をやってるんだろう？」って思ったんですよ。「まだ何かやる物が残っているのかなあ？」でもそれなら商業誌でやればいいじゃない」みたいに思っていて。

**竹田** 「キャプテン翼」のブームが起きて、さらにその後

に「星矢」が出てきたおかげで、既にプロでデビューしていた人も巻き込む大ブームになって、やっぱりプロフェッショナルな人たちだから、作品の作り方っていうものを身に付けていたし、同人だけでやっていた人とは違う世界観やテクニックを作品に盛り込める人たちが増えてきて。「上手いなーっ！」っていう人をいっぱい輩出したんで。

**米沢** 浪花さんはファンクラブ系でアニパロ同人活動を続けていたわけですけど、ずっとその方面で？

**浪花** ボルテスファンクラブは2年くらいでなくなって、その後は友達と上映会をやったり本を作ったりしていて、プロモーター兼業パロディ作家みたいなことを2~3年続けていたんです。その間(自分の)サークル名っていうのは事実上無かったんですね。「シャア猫のこと」なんかも商業誌だけで、同人ではないんですね。

**米沢** 当時のJ9本にはJETとか、もろはかのこ、源氏のお町、アニメ系から出てきた面白いメンバーが(笑)。

**浪花** けっこう今でもこの世界にズルズル生き残っている人が、その頃いっぱい出てきたんですよ。「合体同盟」以後のアニパロ系は「ゴットマーズ」と「J9シリーズ」が(人気を)二分した状態で、81年から83年くらいまでやりました。あの頃のJ9の人って、ずっといるんです(笑)。

**米沢** その後「キャブ翼」が出て来たとき、どういう印象を持ちましたか。

**浪花** 85年ですね。その頃もアニパロっていうのは作品を作る前に萌えありき、まず対象になる作品ありきだから、誰かが「翼」にハマって、「自分の家でのビデオそれまでの全話上映会」っていうものをあっちこちで始めて、そのビデオが世界中を駆けずり回ったんです。

**米沢** 布教活動みたいなものだね。

**浪花** そうですね。昔の人たちの基本なものかもしれないけれど、自分が好きになっても、いいと思ったものは他人にも布教するという姿勢があって。ゲームでも「ファイアーエムブレム」がいいんだよ、って言って自分でゲームのカセットを3つも4つも買ってあちこちに配りまくった人がいてゲーム同人の基礎が出来たみたいな。

## 「絵」と「伝播」からみる キャブ翼ブームの形態

**米沢** 同人の世界はSFやファンタジーが中心で、スポーツ漫画っていうのは嫌われていたジャンルだったと思うんですけど、どうして「キャブ翼」が同人の世界であれだけ受け入れられたと思われませんか？

**浪花** あの頃ずいぶん色々な編集さんに説明した覚えがあるんですが…今で言えば一言、二字で言い表せます。「萌え」なんですよ(笑)。ロボットであってもサッカーであっても宇宙を救う旅であっても変わらない、自分の気に入った人がギリギリの限界に追い込まれながら、頑張ってるって、その横顔を眺めたいっていう(笑)。(主人公たちが目標とする)相手が何であっても関係ないんです。

**竹田** 少女漫画の人間から言わせてもらえば、「学園もの」だったからじゃないですか。同人誌では結局サッカーはどっかに行っちゃって、最終的に学生二人の世界になっていたんじゃないですか。

**高口** 私はビジュアル重視なんで、原作の漫画には絶対に転びませんね。「キャブ翼」を見始めたのは全部同人誌からでしたから、元の漫画を後で見ても、「これで萌えられるのかなあ…」と(一同笑)。だから誰かが作った耽美系の同人モードでなら読めるっていう。

**浪花** 昔はアニパロって、元の絵に似せて描いたものでもしたけれど、キャブ翼だけは普及してからも高橋陽一先生の絵で描いてる人が誰もいないんですよ(笑)。

**高口** キャブ翼がいろんな人を呼び込むきっかけになる転換期だった。それは「絵が耽美ではなかった」のがポイントだったんですよ！自分ももっとかっこよく描いてやるっていう(笑)。

**竹田** もとの絵が上手かったら描く気にもなりませんよね。「もうこれでいいよ」って私なんかなっちゃいますね。

**浪花** キャブ翼はそれまで普通の少女漫画をやっていた人もいきなりパロディをやっていたので、私は凄く驚いた記憶があるんです。

**堀内** 同人誌が同人誌を呼ぶっていうきっかけになった作品でしたね。

**浪花** 符丁は絶対あるんですよ。ツムジが前にあるとか、松山君だったら真ん中分けたとか(笑)、その符丁を外したらもう誰が誰だか分からなくなる。「漫画の記号化」ってやつですね。

**米沢** 女の子たちにとっての「符丁」ってのはやっぱり髪形になりますか。

**竹田** 最後の最後は髪形になりますね。裸になっちゃうし。(一同笑！)

**米沢** キャブ翼前にロリコン・ブームというのがありますが、それまで目立っていなかった男性が同人誌界に入ってきたっていう雰囲気はどうでした？

**堀内** ロリコンって、それまでの典型的な青年劇画っていうのと違って、ずっと可愛っていう感じでしたけれど。

**浪花** ロリコンっていうのはご縁がなくてあんまり分からないんですけど、「こういう絵を描くのは絶対男だよ」って言われて困惑したのはありました。言われても困るなって感じてましたが。

**竹田** 晴海に会場が移った頃ですよ？館も増えてジャンルも多様化してくると、自分の関心のあるジャンル以外は気にしなくて済んじゃうんですよ。当時はある意味ダサかったじゃないですか(笑)。特に眼中には入ってこなかったですね。

**米沢** 女性にとっては萌える部分はない？

**竹田** そう。今だと「なぜこれに萌えるか」みたいなところで「美少女」って理解できるんですよ。なぜならメイドさんとか猫耳とか、耽美の延長上にある要素だから嫌いじゃない世界なんです(笑)。でも当時のロリコンと耽美はあんまりリンクしなかったですよ。少なくとも私は繋がりは感じなかったの、ある意味当時のロリコンが一番相容れないものだったかも知れない。

**浪花** 私も横浜のコミケ(18。81年)で吾妻ひでお先生の「ミャア官」が出てロリコンってものがパッと広がって。これがピークなのかなと思ってたら終わりどころか始まりで、その後から定着したっていう感じでしたね。

**竹田** 「ミャアちゃん官能写真集」買ったなあ(一同笑)。目に付いたものは並んでも買ってましたから。

**浪花** それまでは男女ほぼゴチャ混ぜだったのが、男性系の萌芽が出てきたこの同じ時期に、女の子は女の子で固まるっていう流れが出てきた時代ですね。

**米沢** あの辺はまだ女性と男性が混合していた気がするんですけど。

**浪花** 同じ作品が好きでも男女の間に交流はないんです。女の子が女の子に閉じこもっちゃってきたというか、「どうせ男には分かってもらえないんだ」っていう感じで、コミケに参加しても男性のいるエリアには近づかないで女の子のエリアにだけいるっていう、館の中で泣き別れが始

まった時期でしたね。

## 小説はビジュアルを自分で作れる

**米沢** 小説ジャンルはいかがですか？

**堀内** 小説はむかし生島治郎さんの「黄土の奔流」「夢なき者の掟」、あれは私たちの中で盛り上がってましたよ。同人誌を見てから原作を読んだんですけど、すごく興奮しました。

**竹田** 「黄土の奔流」(の同人活動)に関しては自画自賛ですけど、小説同人のハシリでした！

**堀内** そうそう。私もそれで初めて(小説同人を)見ました。

**高口** 小説だからビジュアルを自分で作れる。「私のヤン(・ウェンリー)はこういう感じ」とか。アニメの方はヤンだけは気に入った。だから「あと全部作り変えちゃえ」って(笑)。同人誌を読んでも面白くて、それでパロディの面白さにはまっちゃったんですよ。それで5冊くらい(銀英本を)出して燃え尽きました、「メロウリンク」も並行してやってたんですよ(笑)。それで色々なものに手をつけてたんですけど、当時はものすごい手紙来ましたよ。カミソリ入りとかが一杯(笑)。

**竹田** そういうことは読者が増えれば増えるほどっていうところがありますし。大手サークルっていうのはそれだけで敵も多かったですから。

**高口** だって「何にでも手をつけるな！」とか言われたもん(一同笑)。「自分の勝ちじゃん！」とか思って(笑)。

**竹田** ちょっと異常にテンションが高まってきちゃったっていうのはありましたね。

**高口** 「イ・S士門(イエスシモン)」の名前を知ってる人は一部で、ほとんどの人は私が前に同人をやっていたって事を知らなかったんじゃないですか。

**米沢** 最終的には自分の「あすか組」のリバーシブルバージョンとか出しちゃうんだから、何でもやる、って言っても自分の作品に手を付けちゃいかんだろうってのはあったんですけど(笑)。

**高口** いや、本当に何でもやっちゃおうかなって(笑)。情熱があるうちにやっちゃえーっと思っていて(笑)。

**堀内** 同人誌は勢いで(作ってしまう)っていうのがやっぱりありますよね。

**高口** それから(同人界との間を)行き来するようになって、「萌える対象は(何か)ないのーっ!？」っていう探索が始まって(笑)。

**竹田** 私はビジュアルに引っ張られちゃうんで。少女漫画で育ってきた美意識に働きかけるものがないとダメだったんですよ。そういう意味で「聖闘士星矢」はネタ的には自分の琴線に触れましたね。「よりロマンチックに」っていうことで「星矢」が来たんですよ。

**米沢** ところでキャブ翼以降「愛さえあれば！」っていうのが合言葉みたいになって、年々広まってきましたよね。…愛はあるんですか？

**竹田** ありますよ。キャラクターを愛してこそでしょう？その愛と(既に絵になっているものに対する)不満とがアンビバレンツなんでしょうけど。でも、私は作家さん、オリジナルの人が一番であると思ってるから。やっぱりどんなパロディも、たとえば「キャブ翼」なら高橋さんを越えちゃいけないと思うんですよ(周囲笑)。でもだんだん「作品はあくまでも素材である」って割り切ったドライな考え方が「キャブ翼」あたりからだんだん出てきましたね。

**浪花** 私も、割と原作絶対主義傾向が強くなって、どんなに凄いものがパロディにあったとしても、原作は原作で絶対大事なんだ、っていう気持ちがあります。

## 過去・現在・未来

**米沢** 同人活動の「今と昔の違い」って？

**竹田** 一言で言えば、巨大になりすぎましたね。

**高口** でかくてジャンルによっては日にちも違うじゃないですか。そうすると3日間とも来なきゃならなかったり。行きたいサークルがあっても辿りつけない。元々コミケは、いろんな所でおしゃべりとかできるんで。

**竹田** 今はそういう交流さえもできない状態ですよ。友達が来てくれても忙しくて。

**高口** 大手サークルなんかになると特にそうじゃないのかな。さばいているだけで精一杯で。

**堀野** 並んで、買って、サヨナラって…。感想を言ったり聞いたりってのもないっていう。

**竹田** だから巨大になったんだけど、自分が関わっているスペースっていうのは本当狭いわね。孤独といえば孤

### 用語解説

#### ■もろはかのこ

J9系ではバクシンガー・シンドロームを主催。近年は、激裸撫同盟のサークル名でアンジェリークで活動。

#### ■源氏のお町

座談会Part3参照。

#### ■松山君

松山光。「キャプテン翼」のキャラクターの一人。同人誌的には、日向次郎と絡ませるパターンが多い。

#### ■黄土の奔流

生島治郎作の冒険小説。65年カップノベルズとして刊行。舞台は1923年の中国。主人公の紅真吾は無一文で誕生日を迎えていた、そんな彼に儲け話が転がり込んでくる。無政府状態の揚子江をさかのぼって歯ブラシの原料となる豚毛を入手すると言う仕事で、莫大な儲けではあるが困難かつ危険きわまりないものだ。生きる目的失いかけていた主人公はこの難事にとりつかれたように仕事を引き受け、中国で食い詰めていた素性のよく分からない9人の日本人を引き連れて旅立つ。小説としての面白さのみならず、紅真吾と同行者葉村宗明の友情と呼ぶにはあまりにも奇妙な関係が、少女漫画ファンの女性の心を掴んだ。森川久美の「南京路に花吹雪」に影響を与えた作品でもある。

#### ■ヤン(・ウェンリー)

「銀河英雄伝説」の主人公の一人。高口さんの気に入ったアニメ版のヤンの声優は、当初は富山敬だったが、富山の死去に伴い郷田ほづみに変わっている。

#### ■青池保子

66年「少女フレンド」でデビュー。ラブコメを長く手がけていたが、「プリンセス」で発表した「イブの息子たち」はSF的ロッキ的ハチャメチャホモコメディとして人気を得る。続く「エロイカより愛をこめて」は、さらにロマン、ハードボイルド風エスピオナーージュを加え、70年代末から80年代後半にかけて絶大人気を誇り、「ばふ」の年間ベストテンの人気1位の常連となり、アメリカのスラッシュファンたちさえもとりこにした。コミケットでは、エーベルバッハ少佐をメインにしたFC「少佐通信」が80年頃かなりの人気を集め、少女漫画ではまっつきあけみ主催の「ファンジェット」と人気を二分した。

#### ■楽書館

75年頃より、水野流転を中心に始まった沙龙的な構造を持つ創作マン研。月一といった形で集会を続け、そこに出入りする描き手たちのネットワークの中から同人誌が生み出されていった。70年代は月刊ペースで「落書館」が出され、批評、感想なども掲載された。さらに個人作品集や小冊子など青コピートと孔版による会誌は多彩であったが80年代にはいとオフセット誌となり、「楽書館」「楽書風」など名前を変えながら、今もマイペースで刊行される続けている。ここに入りにした同人には、高橋葉介、さべのあま、高野文子、堀内真理子、などなど。創作マン研の原点として、その名は広く知られている。

独なのかもしれない。

**高口** 確かに20から30冊くらいしか売らないようなサークル同志の交流ってのは今もあると思うけど、でも(その周囲が)あまりにもにぎやかしいんで、そういうサークルがあっても周りの雰囲気を押されてしまって、のんびりできないよね。

**竹田** 今やってる芸能はお客さんが普通なんですよ。コスプレとかも無いし。好きなタレントの本を普通に買いに来るっていうだけなんで。

**高口** 私も最近、生モノにちょっとハマったんで(笑)。特撮なんですけど、平成ライダーのクウガから龍騎までで。

**竹田** 芸能と言っても特撮はフィクションでしょう。

**浪花** 「半ナマ」と言ってます(笑)。

**米沢** コミケの思い出で面白いエピソードがあれば。

**高口** 私自分の本を売りつけた相手が青池保子先生だったって事がありまして(一同笑)。「買って下さい！買って下さい！買って下さいーい！」って売りつけてたら、知ってる人が「アンタアンタ」ってつかまえてくるから、「何よ今買ってくれようとしてるんだから黙っててよ！」って振り払って(笑)。後で聞いてびっくりしたんですけどどうでしょうかったですね。

**米沢** まだみんな若かったんですね(笑)。

**高口** あと、川崎のころ売り子をやってた時に、自分のマンガのパロディというコスプレをやってる人を見て(笑)。「トロピカル半次郎」の半次郎をやってくれてる人がいて、海ちゃんのぬいぐるみをくつつけて。ずーっと行ったり来たり行ったり来たりして(笑)。あの時に「おたく…」って声をかけられたりしてましたね。そういう言葉を聞いたのはその時が初めてだったかなあ。

**米沢** 竹田さんなんかは同人活動をやめようと思ったことはありましたか。

**竹田** ないです(即答。一同笑)。じゃあなぜやめなきゃいけないのかっていう。やめる必要って無いから。

**高口** もともとプロ志向だったんで、「同人活動は別」っていう気持ちがあって。だから描きたいものができた時には描くっていうくらいで。だから無くなっちゃ困るといふか、「よく飽きないね」って言われるのはやおいだけで(笑)。同人活動自体にはこだわっていませんね。

**浪花** パロディにはパロディの関門があるものでして。やっぱり次から次へと好きな作品が出てくる人はいいん

ですけれど、出てこない人も当然いるわけで。無理に作品を見つけようとする人は、いまは“イナゴ”って言われるらしいですけど、当時は“サーファー”とか言われて蔑まれていた時代がありましたし、年齢的な問題も大きくて、就職したらやめる、結婚したらやめる、出産したらやめる、っていう関所みたいなものがどうしてもあって。私の場合は結婚した時にたまたま「OUT」っていうものがあって、仕事の形でパロディを続けざるを得なかったから、それに引きずられて同人活動も続けられたっていうのはありませんでした。私は萌えの対象が「今は無いな」っていう時期がないんですよ。それもいつも複数で、常によるずサークルなものですから。

**米沢** 別のものに乗り換えた時、ころんだ時、気持ちってどうなるものですか？

**浪花** 前にやっていたジャンルをバカにする人もいるそうですね(笑)。

**高口** 私は燃えつきたっていうのはあるんですね。描き尽くしたっていう。

**堀内** 京極夏彦は友達に薦められて「まあ久しぶりにやってみるか」って。面白かったし、いままでの作品ではあまり取り上げられない時代を扱ってましたし。私けっこう時代考証とか好きでしたので。なんか勢いと思いつきですね。同人活動はもう年中行事になってるでしょ。会場に行けば知り合いも一杯いていつも元気に買い物しているし。「楽書館」は三十年一日というか(笑)、今でも月に一回ちゃんと会合を開いてるんですよ。「漫画描かなきゃー」とかいいながら描かない人たちが(笑)。

## あなたにとって コミケとは？

**米沢** 30年という歴史の中でのコミケについては。

**竹田** やめようと思ったことはないんですが、コミケがなかったら同人誌はとっくにやめると思いますね。他のイベントにも出ていますけど…。私の場合は1回目から参加してるっていうのはありますね。このまま最後まで続けてみようかな、っていう。

**米沢** どっちが先に逝くか(笑)。

**竹田** 私は病欠もない。全回参加。

**堀内** それって凄い！いま30万人から40万人の参加者の

中で10人もいないんじゃないですか？

**浪花** 「ポルテスV」になってからは皆勤です(笑)。コミケがあったから他のイベントがあったわけで、いまはもうどこまで大きくなるんだろうなあっていう感じなんですけど。人が一杯集まってもやっていることは30年前と同じ。デジタルっていう間や技術の進歩があっても、漫画を描くっていう基本の部分は変わらないんですけれどね。

**高口** 他のイベントとかもたまには出ますけど…。今はとにかく、商業誌で描きたいものを最後まで描かせてもらえない状況があるんです。出版も不況なもので、一時期みたいに何でもかんでも載せて、終わらせてくれるっていうことにならないで、作品が宙ぶらりんになっちゃうことがあるんですよ。何とかして決着つけてやりたいっていう、そういう場合、最後はコミケっていうところになるんです。そういう場にもなっています。

**竹田** コミケしか来ないっていう人はいっぱいいますよね。

**堀内** コミケしか来ないっていうサークルも多いですし。

**米沢** コミケにしか無いジャンルっていうのがけっこう多いから(笑)。

**竹田** だからコミケはビッグになっちゃってあまりにも巨大化すぎたんだけど、その分ジャンルが何でも…。

**堀内** そう！必ずあるんだよね。

**竹田** ジャンルがオールOKなのは素晴らしいと思う。

**米沢** 「(今のコミケに)ない物はぜひ来て欲しい」っていうのはあります。

**高口** でもオリジナルよりもパロディやると人気全然違う。惹き方が違うもんね。人気のあるジャンル(の本)であれば何でも買ってくれるんじゃないか、みたいな。

**浪花** 初めてコミケに行った時の、「漫画を好きな人間がここに何百人もいる！」っていう気持ちと、いまマイナージャンルをやっていて「コミケに来れば30人のお友達と会える！」っていうのがおなじで(笑)。

**米沢** 最後に一言お願いします。

**竹田** 同人誌って自分が何かその時に、萌えているもの…。いまでこそ「萌え」って言葉はメジャーになってますけど、昔から、何かを表現しようとする人たちは「萌え」って言葉で表現されるような何かがあったんですよ。それをこう、愛情表現として形にしたものが同人誌になって。今も昔も、その情熱の受け皿としてのコミケは不滅であ

ってほしいです。

**米沢** いいまとめ方だなあ、さすがベテラン(笑)。

**堀内** 自分は自分の創作活動として漫画という表現を選んでいるわけで、割と自分は漫画至上主義なんで、やっぱり創作活動をして生きていたいわけですね。私が選んだ漫画っていうのは、表現方法として大変優れているものだと、やっと世間の人がというか、世界の人が気づいてくれた。コミケっていうのはそれをずっと守ってきた所だと思ふし、創作活動を発表できる「場」っていうものがあるっていうことは大事だと思います。

**浪花** 自分が何かを好きだって叫ぶことができる場が現に存在していて、スペシャルコミケになると24時間叫び続けるわけなんですけど。世界の端っこで愛を叫ぶ、そういう場としてこのままあり続けてほしいなと思います。

**高口** 私自身はコミケに数えるほどしか行ってないし、気持ちっていうものもあんまりないんですけど、なくなったら困るんでできる限り続けてほしいんですけど。自分で絵が描けてよかったなって思います。絵を描けるっていうことで、やっぱり人生の楽しみが人より増えている気がします。あとやおいに関しては、一生枯れないぞっていう(笑)。

**米沢** 「やおい・JUNEは一生」っていう言葉があって、その辺の発言がどっからでてくるのか聞きたかったんですけど、それはまた別の機会ということで(笑)。どうもありがとうございました。

聞き手・米沢嘉博(コミケット準備会)

オブザーバー参加・堀野密



コミケット初期から、マンガ・アニメ・ゲームの多様な流行とともに、会場を彩るコスプレ。その華やかさの一方で、コミケットのコスプレの歴史は、混雑する会場内でのトラブルをいかに減らすかの様々な努力の積み重ねでもありました——（牛島えっさい）。

## コスプレのはじまり

古来より、洋の東西を問わず「祭の場」には、女装を含む仮装が現れています。

それはオフィシャルなものであったり、余興的なものであったりしますが、「ハレの舞台」に際し、普段とは違う格好をする、憧れ・畏怖した者に扮するという行為は、宗教的な意味も含めて、特別なことでは無いのでしょうか。

1930年代に、アメリカでのSFコンベンション「ワールドコン」で、SF作品をモチーフにしたコスプレがいたという記録があります。ちなみに、欧米では、コスプレを仮面舞踏会になぞらえ「マスカレード」と呼称していましたが、90年頃から、アニメの扮装を「コスプレ=CosPlay」と呼ぶケースが増えています。ワールドコンを参考にした「日本SF大会」や、「マンガ大会」も、マスカレードが取り入れられ、60年代の終わり頃から簡単なコスプレが、会場内を闊歩していたと聞きます。

## コミケットにおける、コスプレの歴史

### —コミケでのコスプレ創世記—

マンガ大会から分裂したコミケットでも、当初からコスプレがいましたが、その内容は、当時の主流であった少女マンガ(ロック系や耽美系)のイメージからロックっぽい服装、黒スーツ系男装やフリル付ドレス、ナチっぽい格好が主流でした。それはコスプレと呼ぶには遠く、イベント用の晴れ着、おしゃれ着でした。今で言う所のゴスロリを考えてもらえばいいでしょう。

アニメ系サークルには、お祭りの要素を持った「晴れ着」は、まだ無かったのです。そんな中、77年のコミックマーケット5に、「海のトリトン」のコスプレをした少女が現れ、非常に評判になりました。その次の回には、タツノコプロの協力を受けたファングループが「科学忍者隊ガッチャマン」の衣装で登場しています。これは、企業のイベント用コスチュームを借りたものですので、多少意味合いが違いますが、この頃より「アニメ系コスプレ」が“あり”とされ、少しずつ増えてきます。

### —アニメ系コスプレの勃興—

同じ頃始まった「宇宙戦艦ヤマト」のブームから、アニメファン、アニメサークルの数が増加し、コミケットのコスプレでも、アニメを基にしたものが主流となって行きます。

79年には「機動戦士ガンダム」の大ブームが起き、この状況は決定的となり、マスコミにも注目されていきます。

80年9月のコミケット15では、コスプレイヤーが激増し、会場の狭さも相まって、コスプレに対する批判が徐々に出てきました。81年には、マスコミに紹介されたことにより、軍

装コスプレがコミケに増えるようになります。これまでの「女性による制服系コスプレ」ではなく、「戦闘服」が目立つことも特徴でした。この年の冬から、コミケットはその会場を晴海に移します。広い敷地を持つこの晴海の会場で、コスプレは“花いちもんめ”や“だるまさんが転んだ”などの「表に出る」遊びを行うようになります。戦う漫画家「破拳拳竜」が、自身の一座を率いて、ヒーローショーを行ったのも、この頃です。同じ頃、コミケット準備会内で「仮装の人」と呼ばれていた「アニメの格好をした参加者」に対する呼び名が、“衣装で遊ぶ=コスチューム・プレイ”となって行きます。“コスプレ”と略した言い方も語呂がよく、この呼び方は、“マスカレード”よりも親しみ易く、次第に広まって行きました。82年の「うる星やつら」、サンライズ系アニメなどのアニメブームも手伝い、コスプレはファン活動の一つとして、人気を得ていったのです。



南館スロープ下。この頃の規模としては、かなり大勢の集合写真。



南館前にて。花いちもんめ

### —コスプレ規制の始まり—

83年のコミケット23の際、近隣住民からの苦情により、露出の多いキャラクターを中心に、コスプレのまま館外へ出る行為が規制されました。

その年夏のコミケット24では、サークル参加者からの申し出に、準備会が許可を出す形で、「うる星やつらコスプレコンテスト」が行われます。

反面、同人誌即売会であるコミケットへの取材がコスプレに集中することや、コスプレをする参加者が同人誌を購入しないなどの問題から、サークルを中心とした参加者より、コスプレ不要論が出てくる様にもなりました。また、コスプレイヤーの中に、館内の非常ハシゴに登ってしまったり、池に入ったりという、問題を起こす人も出て、コスプレへの風当たりが徐々に強くなってきました。

84年の冬には「テクノポリス21C」の巨大はりぼてが現れ、参加者を驚かせます。これが、後に続く“大型コスプレ”の魁になりました。



巨大ロボットコスプレの走りテクノポリス21C。C館内にて。後の子供が見上げています。



有志のマイクセット持込で、リン・ミンメイショー。C館にて。



狭い会場で苦労しました。東京流通センター。霊幻道士より、キョンシー御一行

### —コスプレ冬の時代—

85年には、「キャプテン翼」の大きなブームが起こります。“チーム名の入ったユニフォームを着るだけ”という手軽さもあって、特に女性のコスプレイヤーが激増しました。しかし、“コスプレ”という行為に慣れていないからか、スパイクで怪我をする、サッカーボールを会場内で蹴って、周囲に迷惑を掛けるなどの問題が続出し、この2点が危険物以外での、初めての“持ち込み禁止物”になりました。

この夏、TBSテレビがコミケットを取材しました。その映像の中で、あるコスプレイヤーが、リポーターに煽られて模造刀の抜刀アトラクションをしてしまいました(模造刀の持ち込み自体は、この時点では禁止されていません)。また、他のコスプレイヤーも不用意な発言をしてしまい、番組自体の内容がコミケットに好意的では無かったこともあって、参加者の怒りの矛先は、コスプレに向けられたのです。

86年冬のコミケット31より、会場が大田区の「東京流通センター」に変わりました。空きスペースの無い会場で、しかも雪が降って表に出られない状況でした。会場内が非常に混雑し、居場所の無いコスプレイヤーが、スタッフや参加者と揉め事を起こすことになりました。

87年も同じ会場で夏、冬と行われましたが、夏には「聖闘士星矢」のブームが起き、突起物の多い特徴的なコスチューム(聖衣)による、引っ掛け事故が目立つようになります。この件で、尖ったコスチュームとチェーンが、禁止事項に加えられることになりました。また、星矢たちの「私服バージョン」で来場・帰宅するコスプレイヤーもいて、響を買ったのです。

冬のブームであった「ファイブスター物語」も、幅を取るコスチュームで、星矢の時と同じトラブルを繰り返すことになりました。この時期のコスプレは、会場の構造、そして自分たちの行動で、他の参加者から「邪魔」という印象を持たれてしまうのです。



—ゲーム系コスプレの発生—

88年より会場を晴海に戻したコミケットには、「RPG」という新しいジャンルを迎えることとなります。マンガ・アニメに次ぐ、ゲームというジャンルは、社会的現象にもなりました。当然、この波はコスプレにも影響を与え、「ドラゴンクエスト」などのゲーム系コスプレが激増し、ゲーム人気も相まってコスプレイヤーの低年齢化が進むことにもなります。

反面、以前のように「コスプレイヤーの大半」を占めるような人気作品は無くなり、その時々メインストリームのジャンルを中心に、幅広い分野に「コスプレ対象」は広がっていったのです。例えば、芸能系や映画系、小説系といったジャンルのコスプレが目についてきました。

晴海に戻った1回目コミケット34より、女子更衣室が設けられます。それまでは、トイレか物陰などで着替えるしかなかったのです。一般参加者の増加に伴い、トイレでの着替えが混雑の原因になることが設置の主な理由でした。

ちなみに、男性更衣室はまだ無く、相変わらずトイレや物陰などで着替えていたのです。



この頃すでに、集合のカウントが始まっていた。立っている同盟軍が、カウンター。南館前。

—コスプレ氷河期—

89年の夏コミ直前に、あの「宮崎事件」が起き、コミケットは、悪い意味で世間から注目されてしまいます。コスプレも、数の上では「勇者シリーズ」が多かったのですが、露出系や奇抜な物ばかりが好奇心で取材され、イメージが悪化したのです。

この年の冬より、会場が千葉県の「幕張メッセ」になりました。この会場には小会議室が多く、ここで初めて、「男性更衣室」が設けられたのです。ところが、この会場には「コスプレが集まれる」場所が全く無く、「一般行列を収容していたスペースが空く」までは、会場の隅にしなければならなかったのです。

90年夏のコミケット38の際、その時に人気のあった「鎧伝サムライトルーパー」と新作映画「天と地と」の影響で、刀を差すキャラクターが増えました。非常に混雑した会場内で、鎧系コスチュームに帯刀は危険であり、そんな中「真剣を振り回した人がいる」という噂が流れました。

このため、2日開催の2日目から、急速「長物・武器類の持ち込み禁止」の処置が行われ、その後、正式に禁止物品に入ったのです。この頃、東京の他の同人誌即売会では、「コスプレ禁止」を規則に盛り込むところが増えました。

結果的に、主だったイベントでコスプレが出来るのは、コミケットだけになったのです。

残念なことに、この様な状況の中、コスプレイヤーのマナー低下が目立つようになり、コスプレイヤー自身からも「コスプレの終わり」がささやかれる様になるほどでした。



撮影する場所に苦労しました。幕張メッセにて。



長物も持ち込めた時代もありました。84年新館横にて、銀河鉄道999、綿の国星、銀河旋風プライガー。

—新しい体制へ—

91年夏に、コミケットはその会場を、三度、晴海に戻しました。その際、南館の2階に男女統合更衣室を設置し、それまで準備会内で指示系統の違った2つの部門を、1つにまとめました。

更衣室を設置するに当たり、コスプレに関する注意事項とアンケートを配布し、更衣室出口には「コスプレ相談所」という、コスプレのチェックを行う窓口を設置、利用協賛金としてカンパを募る方式を採りました。



C館にて銀英伝から同盟軍集合。

他のイベントが「コスプレ禁止」を続ける中、コミケット準備会は、コスプレのルールを定め、カタログに明記し、場所(一般参加者待機列終了後のC館)を設けることにより、コスプレイヤーの参加意識を高めるように努めました。

このルールは、後の多くのコスプレイベントの規則を作る際に参考にされ、引用されています。

同じ年の冬、コミケット41では、それまでのカンパに代わり「コスプレ登録証」を用いた、定額の登録制が導入されます。

コミケット40の際に、一番多かったコスプレは「銀河英雄伝説」の同盟軍でした。シュプレヒコールと共にベレー帽を放り投げるポーズがギリギリ許可されましたが、天井・電灯にベレー帽を引っ掛ける人が多数出て、後始末が大変でした。

ところが冬には、同じ作品の帝国軍が数の上で増えたのです。長いマントや重厚な制服が冬向きだったのでしょうか。

92年夏は、非常に暑い中でのコミケット開催でした。「新世紀GPXサイバーフォーミュラ」と「機動警察パトレイバー」が大きく伸び、会場の中央通路を彩ったのです。しかし、パトレイバーの階級章やワッペンが、警察のものと紛らわしいことから、これらの着用が制限され、この制限は他の官公庁の制服類にも及ぶようになりました。

冬のコミケット43には、「美少女戦士セーラームーン」と「ストリートファイター」から、セーラーマーズとセーラーマークュリー、春麗が大人気となり、女性コスプレイヤーの登録数が、男性の3倍以上になりました。これ以降、女性コスプレイヤーは、男性コスプレイヤーの数を大きく引き離し、コスプレ＝女性というイメージが定着してきます。

93年からは、折からの格闘ゲームブームで、男女を問わず、格ゲーキャラクターが人気を得てきます。コミケット44では、「餓狼伝説」から不知火舞やテリーボガードが大量に現れます。

創刊され始めたゲーム雑誌でも、グラビアなどにコスプレイヤーが起用され、コスプレイヤーのアイドル化が起こります。アニメ化された「幽遊白書」が奮闘するのですが、やはり格闘ゲームの勢いは根強く、この1年間は“ジャンル”としての、これ一色に染まった感があります。

翌年も格闘ゲームのブームは続き、それに加えて「ファンタジー」「ぶよぶよ」など、他のゲーム系もブームになりました。その中でも「バンパイアハンター」のモリガン、フェリシアは「赤ずきんチャチャ」を押さえて盛り上がり、コミケット46、47と、「ゲーム系」という単語がコスプレのキーワードでした。

92年から94年の終わりまでの間、コミケットに登録したコスプレイヤーの数は、毎回、倍々が増え、94年末のコミケット47では、各日で6千人を超えたのです。



芸能系コスプレより。シュクリームシュ。西館前。

—「ちえんじ」創刊—

「コスプレ」という単語が一般化し、広まって来ると、新しい人が増えてきました。コスプレブームと言うと聞こえは良いのですが、人数が増えると、ルールを知らない人も出てきて、マナーの低下が目立ってきます。RPGや格闘ゲームのキャラクターの中には、刀剣などの武器や杖、棒を持ったものも少なくありません。生兵法で擬闘をして怪我をする人も、出てきました。格闘ゲームに限らず、ファンタジー系アニメなどのキャラクターにも同様の問題が発生しました。

このような状況に対応するため、コミケット準備会ではコスプレをする参加者を対象に「ちえんじ」というルールを書いた小冊子を発行しました。登録証を兼ねたこの冊子は、イラストを多用し、「持ち帰って読んで貰う、次回に気を付けて貰う」ことで、長い目で見た「マナーの向上とルールの普及」



- Q1.同人誌を知ったのはいつ? どうやって?
- Q2.初めて同人誌を作ったのはいつ? その時の感想は?
- Q3.コミケットを知ったのはいつ頃? どうやって知りましたか?
- Q4.コミケットに初めて来たのはいつ? その時の感想は?
- Q5.ペンネームとサークル名の由来は?
- Q6.今までのジャンル遍歴は?
- Q7.これまでの商業ベースでの活動暦を教えてください。
- Q8.最近の同人活動について教えてください。

## 沖由佳雄

当時のサークル名/  
グループ601

A1.肉筆回覧誌は石森章太郎氏のまんがが入門で。現在のものに近いものは武蔵大漫研。水谷潤氏のパロディー版宇宙戦艦ヤマトで、まんが画廊(喫茶店)で知りました。A2.シベールVol.0。1979年頃で男性向けロリのコピー誌。A3.上記パロディー版宇宙戦艦ヤマトで。A4.最初は大田区産業会館ですが、四半世紀前の事なのであまり記憶にありません。その次の都産貿台東館が広がって綺麗だった方が印象的です。A5.ペンネームは本名を逆さに読んだだけ。サークル名は映画「アンドロメダ…」に出てくるコンピューターの演算不能のサイン。A6.シベールでオリジナル男性向けロリ系→エビカールでオリジナルファンタジー→以後男性向けアニパロ、ゲーパロ。基本的にロリ系です。A7.まんが家としてはアニメック誌でデビュー。プチアップルパイ、プチパンドラ誌などに執筆。その後、ロリポップ、レモンビートル、ドルフィン誌などで同人誌紹介ライターとして活動。A8.流行に背を向けて好きなものを黙々とやっております。



## 緒方賢美

当時のサークル名/  
ばいぐる

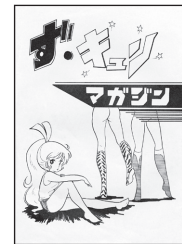
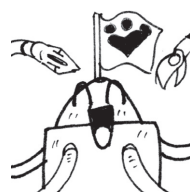
A1.アニメージュ創刊号の紹介記事で同人誌というものがあることを知りました。A2.自分が作ったのは83年8月の「演画帳」。アニパロの原画集(コピー誌)。A3.大学で上京してから所属したサークルの人たちに教えてもらって。A4.たしかコミックマーケット19。サークルの人達に連れていってもらいました。今と比べれば規模はずっと小さいものですが、当時はマンガ好きにとっては肩身の狭い時代でしたので、同好の士が大勢いる!ということにまず驚きました。A5.当時所属していたサークルで作成した本の企画で、執筆者全員声優の名前をもじったペンネームで発表することになり(神谷明子とか塩沢兼子とか)、それが気に入ってずっと使っています。サークル名は藝まで持っていけるような良い同人誌を作りたいと思って「聖書(ばいぐる)」。A6.アニパロ→成年向。対象作品はその都度変わっています。A7.88年~91年徳間書店「アニメージュ」にて「金星人」のP.N.で時々カット描き。A8.縁の下で友人・妻に支えてもらいながら細々と個人誌活動を続けています。



## 計奈恵 (かすなけい)

当時のペンネーム/  
えらせ・うなべす

当時のサークル名/  
新撰組



A1.昭和52年頃。偶然寄った百貨店の一角で小規模な同人誌イベントを発見してから。A2.昭和58年8月。夏コミ参加。ベペロの冒険とザンボット3の資料本で制作スタッフにインタビューしたりとチョットプロ気分でワクワクしました。A3.昭和52年頃 先の同人誌を創っていた友人に誘われました。A4.昭和53年夏コミ当時は「呼び込み」「自主BGM」在りでしたのでお祭り気分で同好の友人もたくさん出来ました。A5.計奈(ケナ)恵(恵子)。最初に創ったアニメ資料本のヒロイン。A6.アニメ資料・評論→オリジナル(健全)→オリジナル(成人向)→アニメ・ゲーム(成人向)A7.アニメック誌デビュー(カット描き)→以後 同誌まんがデビュー→週刊少年マガジン(読切)・月刊ジャンプ(読切連載)・少年ガンガン(連載)・ブリッコ、マルガリータ、LP、他各ロリコン誌・サンケイ出版成年誌・講談社クリイミーマミ(OVA版コミック化)・くりいむレモン監督・原作・キャラデザイン。A8.好きなものを好きに描くをモットーに、只今自分萌キャラ1美紗緒ちゃんの男性向オリジナルストーリーを執筆中☆

## 毛羽毛現(けうけげん)

当時のサークル名/姫麟クラブ



A1.17才(だったと思う)。友人に連れられて(だったと思う)。A2.17才(だったはず)。高橋留美子のFCの会誌。本になる、というのがとにかく楽しくて。A3.17才、はじめて参加した時。A4.同上、知らない世界 楽しそう。A5.P.N.はわけのわからん妖怪さん。サークル名は縁起の良いものを、とゆ一事で。A6.うーん、ちょいパス。A7.マルガリータ、ロリポップ、キャンディタイム、1回だけホラーハウス、あと何かあったけど。A8.ズ切におわれているけど、のんべんだらりと。

## まんが画廊から始まった

米沢 ちょうどロリコンブームの頃から『キャプテン翼』ブームが来る間に目立った活躍をされた方々に集まってもらいました。まずは、みなさん、同人誌やコミケをどうやって知ったのか、というあたりから話していただければ。まずは長老から(笑)。

沖 長あって(苦笑)。純粋に初めて同人誌をやったのは、高校時代に先輩がやっていた肉筆回覧誌に参加したのが最初なんです。今の形に近いものとなると、「パロディ版宇宙戦艦ヤマト」(カラクタクラス・ラボ)ですか。あれでコミケの存在も知ったんです。実際に参加したのは大田区産業会館からだと思うんですけど記憶がないんですよね。次の台東館は、きれいだったなという記憶がありますね。

米沢 どうやって「パロディ版宇宙戦艦ヤマト」を知ったの?

沖 まんが画廊に置いてあったんですよ。まんが画廊というのは……どう説明したらいいのか(苦笑)。

計奈 僕が説明しましょう。江古田にあった喫茶店なんですけど、経営の母体は『コン・バトラーV』なんかを企画したひろみプロでね。業界の若手とか、その後業界に入るようになる人が多く出入りしていたんですよ。私が出入りするようになったのは、『宇宙戦艦ヤマト』がきっかけで。当時、まんが画廊で『ヤマト』のセルを展示していて、それを見に行った。

沖 「シベール」のメンバーっていうのは、あそこに集まった人間を中心に構成されてましたもんね。

米沢 蛭子神健も?

沖 それも画廊です。純粋な意味でロリコン誌というのを最初に出した人は、蛭子神さんですよ。ロリータ」という。ただ、彼の本は文章中心だったんで、まんが中心の最初が「シベール」なんです。

米沢 きっかけはなんだったの?

計奈 まあ偶然ですね。画廊に来ていた人たちの目的は、バラバラだったと思うんですよ。集まるうちに、それぞれのジャンルで仲間になってるっていう感じで。我々なんか一番良い例だと思うんですよ。吾妻ひでお先生を中

### 用語解説

#### ■肉筆回覧誌

手描きの原稿をそのまま綴じた同人誌。当然1冊しかない。回し読みすることになる。

#### ■宇宙戦艦ヤマト

74年10月~75年3月に放映された松本零士原作のTVアニメ。本放送時は低視聴率のため途中で打ち切りになったが、コアなファンが付き、再放送で人気が沸騰し、77年映画が上映されたときには徹夜で行列が出るなど、社会現象にもなった。当時はアニメも「まんが」と呼ばれ、完全に子供のためのものであったが、この作品以降、ティーンエイジャー以上を対象にした作品が商業的に成立し、アニメ雑誌を始めとする関連産業も盛んになっていく。

#### ■まんが画廊

計奈さんが語るように、企画会社ひろみプロが経営母体となっていた喫茶店。編集者、漫画家などのいわゆる業界人とその予備軍が多数出入りしていた伝説の梁山泊である。しげの秀一、永野護、川村万梨阿、ゆうきまさみなど、業界に多くの人材を供給した。セル画の展示や販売なども行われた。「OUT」のヤマト特集号(別ページ参照)や、「ガンダム記録全集」などの編集作業もここでなされたという。当時の様子は元アニメック編集長・小牧雅伸が同誌に連載した「ナンカアロウ物語」や「ラボポートラックス 機動戦士ガンダム 宇宙世紀vol.3 伝説編」に詳しい。

#### ■まんが画廊で「ヤマト」のセルを展示していて、それを見に行った。

アニメ雑誌も家庭用VTRも無い時代ならではの話。

#### ■コン・バトラーV

「超電磁ロボ コン・バトラーV」。76年4月~77年5月放映の長浜忠夫監督のドラマチック・ロボットアニメの第一弾。この時の敵役のガルダに女性ファンの人気が集まった他、ヒロインの南原ちづるには男性ファンの熱い支持があった。

#### ■シベール

ロリコン同人誌ブームの草分けかつ立役者の役割のサークル。主な執筆者は、吾妻ひでお、沖由佳雄、孤ノ間和歩、豊島ゆいさく、計奈恵、三鷹公一、森野うさぎ。全員別のペンネームで書いている。79年のコミケット11より参加。

#### ■蛭子神健

帽子にサングラスとマスク、更に黒いコートといった変質者スタイルのコスプレで有名な奇人。「アリスmania 集団キャロルハウス出版部」としてコミケット11より参加。ライター・編集者として「プチパンドラ」「レモンビートル」「ロリタッチ」などの美少女マンガ誌に関わる。

#### ■吾妻ひでお

SFマンガ、ギャグマンガ、ロリコンマンガを語るときにははずせない作家。この座談会の趣旨に添って注をつけると、当時少年まんがで魅力的な女の子を描くために少女まんが的な手法が取り入れられるなど、様々な試行錯誤があった中、手塚直系の枠内で最も魅力的でエロティックな少女を描くことに成功した描き手と言える。一時期創作活動から完全に離れていたが、近年微妙ながらも復活を遂げつつある。

心にしている、で、沖さんがいて集まって、アシスタントになって……と。

**沖** めぐりめぐってという感じで。

**米沢** 最初のころのコミケの印象ってどうだったんですか？

**沖** 落ち着いてた感じの記憶はありますけどね。いまほどガツガツしてなかったですけどね。

**毛羽毛** あんな場所、他になかったよ。

**計奈** 私の場合は、グループTっていうサークルがあったんですよ。メンバーには高橋留美子さんとかがいて、私、それ目当てに入会したんですよ。同人誌というのを知ったのはそれが最初だった。作る方で参加したのは、友達が「試映館」というアニメ資料本を作っていて——当時まだ「ロマンアルバム」すらなかった頃ですよ。そのメンバーについていったのが、コミケに参加した最初だったかなあ。

**米沢** その頃やっぱり中心になったのは『ヤマト』なのかな？

**沖** 本を作り始めたときには、すでに『ヤマト』は終わってましたよ。そもそも水谷潤さんの「パロディ版宇宙戦艦ヤマト」って、確か1年間ぐらしかけて作った本ですよな。「武蔵大漫研」の会誌に連載して、それをまとめた形だから。だから、すでに時間が経っている。

## 男性系のはしりの

### 「シベール」

**米沢** 「シベール」って、今で言う男性系のはしりだったんですけど、そのあたりは？

**沖** 当時、三流劇画が全盛の時期で。それに対しての反発と、若かったんで勢いにはしった部分もあったかなあ(笑)。

**計奈** それで言うと、私は少年誌志望だったんで、エロは嫌だったんですよ。だから、シベールメンバーに入った途端に、何こんなの作ってるのって、正直驚いた。

**沖** ははは。

**計奈** それを豊島(ゆーさく)さんに話したら、「まんが画廊でロリコンと呼ばれ、ここ抜けて、お前に行く道があるのか」って言われてしまって。「しまった、もう俺は抜けれないんだ」と。

**一同** (笑)

**米沢** 一番最初のメンバーって何人くらい？

**沖** 本当に最初のメンバーは、吾妻先生と私だけです。そ

れで、ジベールのVol.0というコピー誌を作ったんですよ。

**米沢** 最初からロリコン漫画っていうコンセプトなの？

**沖** そうですね。今に比べればかわいらしいものですけども。

**計奈** 孤ノ間(和歩)さんかな、最初に(性器を)全部入れちゃったのは。

**沖** 孤ノ間さん(という説)が、まあ有力かなあ(苦笑)。結局、「シベール」の一番のイメージメーカーってというのは、吾妻先生と孤ノ間さんだよな。

**米沢** 結局何年頃から活動してたの。

**沖** 79年かなあ。最初の号をコピーに持って行かなきゃというときに、『機動戦士ガンダム』の第1話が始まったのは覚えてますね。

## 様々な形でコミケットへ

**米沢** どちらが先かはわからないけれど、高橋留美子がムーブメントになり始めたのは、ほぼ同時期だったと思うんだけど。最初は毛羽毛君はファンクラブから？

**毛羽毛** そうです。もう高橋(留美子)さんに関しては、ファンクラブで始まって、それで終わってしまった。そのあとはオリジナルの方になって、現在に至る——って、早っ(笑)。

**米沢** ファンクラブを作ったのはいつくらい？

**毛羽毛** 高校生ですね。近所の高校の女の子と一緒にファンクラブやろうという話になって集めたら、別のファンクラブから「あそこは女の子しかいない」とかいうような、変な噂がたっちゃって。

**計奈** いやいや変じゃないよ。私は会合に混ぜてもらったことがあるんですけど、たしかに女の子しかいなかったもん(笑)。

**毛羽毛** でも、手伝ってくれる人は女の子ばかりだったんですよ。

**米沢** じゃあ、最初にコミケにきたのは、ファンクラブとして？

**毛羽毛** そうですね。連れられてって感じかなあ。アンケートには川崎市民プラザって書いたんだけど、大田区産業会館のときも確か1回あるんですよ。で、それからは1回だけ欠席したぐらいで、ずっとですね。最初はファンクラ

ブのサークルで入って、で、ちょっとお休みして「姫麟クラブ」になって現在に至る——もうええっちゅうねん(笑)。

**米沢** 緒方さんは？

**緒方** 「迷宮」の付録か何かで、『(海の)トリトン』のトリトンとピピがHしてるのと、ホルスとヒルダがHしてるカットのいったペーパーがありましたよね。

**米沢** ありましたね。

**緒方** 地元の岐阜にパルコがOPENして間もない頃なんですけど、その漫画コーナーみたいところに、それが壁にペタッと貼ってあったんです。

**一同** (笑)

**緒方** 確か高校に入った頃だったと思いますが、それを見てすごくビックリして。それで、「すいません、これコピーさせてください」って(笑)。今から思ってもあれはすごい度胸あったなあ。プリントショップがそのパルコにあったものですから、そこでコピーをとらせてもらった。そのへんからです。「おかしな世界がどうもあるみたいだな」っていうのを知ったのは。「アニメージュ」が1978年の5月に創刊して、それに同人誌のコーナーがあったんで、同人誌の存在というのはすでに知っていたんです。で、僕はそうしたファンクラブに投稿してたんですよ。ただ、そのころのサークルというのは女の子ばかりだったんですよ。地元の小さな即売会に行ってみても、リヒテルとかハイネルとかばかりで。しかもそれが裸で抱き合っている。そういうのを見ていると、女の裸でもいいんじゃないか、と思えてきちゃった。

**米沢** そっち(ホモパロディ)の世界に行きはしなかったんだ。

**緒方** ええ(笑)。そんな中で、男と女のものも描いてあったのがRexっていうサークルだったんです。そのメンバーの方達が名古屋から東京へ移って行って、僕も大学から東京に出てきて。それで最初は荷物運びとしてコミケットに連れていってもらった。

**計奈** 僕が、緒方さんと知り合ったのって、そのRexの頃だと思うんですよ。

**緒方** そうですね。

**計奈** 本で見たときは女性名だったので、最初はまさかこういう人が混ざっていたとは知らなかった(笑)。

**米沢** 当時、「シベール」の存在は知ってたの？

**緒方** 全然知らなかったです。描くと同人誌に掲載して

### 用語解説

#### ■高橋留美子

「うる星やつら」と「めぞん一刻」の2作品で80年代前半に少年・青年まんがファンから圧倒的な支持を獲得した作家。メジャーな人気とカルト的なファンが両立していた。その後の「らんま1/2」「犬夜叉」では、同人誌的には一転して女性ファンの人気が高い。

#### ■ロマンアルバム

徳間書店発行のアニメムックの草分け的存在。第1号は「宇宙戦艦ヤマト」(テレビランド増刊)。この大ヒットが「アニメージュ」につながる。ごく初期の何冊かは米沢嘉博も編集として参加。

#### ■水谷潤

どこが入門かわからない「アニメーション入門講座」(87年)、C翼・星矢ブームを揶揄しまくった「世紀末同人伝説」(88年)の作者としても有名。本名の宮川総一郎名義で、「兜町ウォーズ」「マネーウォーズ」なども執筆している他、ファミリーソフトでゲームソフトのプロデュースも手がけている。

#### ■豊島さん

豊島ゆーさく。ペドで獣人。本人はいたってまじめな人だが、ひとたびア・バオア・クーあたりに理性を置き忘れ、たががはずれた状態のパロディの破壊力はすさまじく、沖氏がうみうしになるほど。

#### ■孤ノ間さん

孤ノ間和歩。ロリコンの流れの一つに少女まんがタッチがあり、その第一人者。また、ふっくらとした少女の類など、手塚・吾妻から、現在のブニ画にいたる系譜の重要作家の一人。

■「ガンダム」の第1話が始まったのは覚えていますが機動戦士ガンダム。いわゆるファーストガンダム。79年4月～80年1月放映。ビデオデッキが普及していない頃は、こういった記憶は刻み込まれることになる。

■もう、高橋(留美子)さんに関しては、ファンクラブに始まって、それで終わってしまった

当時、毛羽毛さんの作ったファンクラブの会報には、「うる星」のコスプレをしている永野護と川村万梨阿のツーショットの写真が載っていたりする。

#### ■トリトン

原作は手塚治虫の「青いトリトン」。TVアニメ化にあたり「海のトリトン」に改題(72年4月～9月放映)。プロデューサーは西崎義展(宇宙戦艦ヤマト)。監督が富野喜幸(機動戦士ガンダム)。凛々しい主人公の少年トリトンとまんがと違う衝撃的なクライマックスで多くのファンをつかみ、アニメFCや会報などが全国で多数作られ、コミケット初期のアニメブームをリードした作品の一つ。なお、ピピはヒロインの人魚。

#### ■ホルスとヒルダ

東映動画制作の長編アニメ「太陽の王子ホルスの大冒険」(68年)のヒーローとヒロイン。演出:高畑勲、場面設計:宮崎駿。当時のアニメファンにとっては一般常識的作品。

もらえるから、嬉しくてどんどん描かせてもらってはいたんですけど、よそのサークルがどんな本を出しているかっていうのは、よくは知らなかった。周りの人は女の人ばかりだったので、本をいただいても、やっぱりリヒテル×ハイネルで(笑)。世の中には僕みたいなことを考えて描いてる人はいないのかなって思っていました。それが、コミケットにきて、あ、僕1人だけが異常だと思ってたけど、おかしな方向を向いてる人たちが他にもいるな、ということがわかった。

**毛羽毛** 異常じゃなかったんだ、と言うべきだよ(笑)。

**沖** コミケはどこから参加したんですか？

**緒方** 1981年の19歳のときで、(晴海の)南館でやってたころです。

**米沢** じゃあ、ロリコンブームが盛り上がっていた時期だよね。

**緒方** でも、そういうのはまったく分からなくて。即売会ではお手伝いしながら、空き時間に回らせてもらってました。たぶん、僕が回るような時間帯のころは、この座談会の方々の本っていうのは、もう売り切れていたんじゃないでしょうか。だから、流れとしては、まったく外れてますよね。今でいうやおいの中に、ちょこっと変り種が生えて、それがそのまま男性系に寄っていったという感じでしょうね。

**計奈** やおい系という思い出すが、当時「コンビネーション」(合体同盟)っていうサークルがありましたよね。川崎市民プラザだったと思うんですけど、そこと背中合わせに配置されたことがあると思うんですよ。で、どっちの列に並んでた人だったか、「あ、やっぱり『シベール』と『コンビネーション』って姉妹誌だったんだ」ってボソッと言ったんですね。そしたら、振りかえってお互いに「こいつらと一緒にしないでください」って。

**一同** (笑)

**米沢** 安田さんは、創作同人誌からだよね。

**安田** 私は元々、少女漫画家になりたいという高校生としてはまっとうな夢を持ってたんですよ(笑)。で、コミケ第2回目のときに、「別コミ」か何かはその告知が並んでいたんですね。それで行ったら、受付の人がチラシを配るのにすごくもたもたしていたから、自分でひたたくって配ったんですよ(笑)。その受付が当時代表だった原田(央男／霜月たかなか)さんと、次も来なさいって誘われた。

**沖** 徴兵だ(笑)。

**計奈** 抜擢だよ(笑)。

**安田** それから、初めてシベールを見たときに「あ、こういうの私好きだったのかも」って。それまで、私が小さい子が好きなのは母性本能にあふれた人間だからだ、と思っていたんですよ。それが、ガラガラと……(笑)。TO FROMというサークルで本をつくり始めたのが、1979年ぐらいかな。当時はコピーが高いんで、青コピー機を買って一晩かけて刷って、糸を張って、青焼きを乾かして、朝まで製本してみたいなことをやっていた。

**沖** 当時のコピーって、原稿を渡して店員にやってもらわけですよ。「シベール」の原稿はさすがに渡すのに勇気がいった(笑)。

**毛羽毛** ちょうどコピーからオフセットに、表紙も白黒からカラーに変わるっていうのを、みんな経験してる時代ですよ。

## 高橋留美子の衝撃

**米沢** あのとキロリコンって大きなテーマだったわけだよ。

**沖** それは基本的にあっただけでしょうけど……。

**計奈** 実際には、みんなバラバラだったんじゃないですかね。私は、これは作り事っていうか、ある種の童話なんだと思って描いてた。

**米沢** なるほど。最終的には、ロリコンっていうテーマではなくって、大人の童話みたいな形でいろいろ分かれていくことになるわけだけ。

**毛羽毛** 「エピカル」のときはもうストーリー中心でしたよね。

**沖** 「エピカル」が終わった段階で、シベールメンバーは個々に活動を始めることになりますね。

**米沢** 「シベールの子どもたち」みたいな書き方をしたこともあるんだけど、色んなものが81、82年ぐらいからばあっと出てくるでしょう。緒方さんなんかは、高橋留美子系のパロディみたいな感じで、結構注目されたし。

**緒方** そうなんですか?(苦笑) この座談会は、ロリコン&留美子がキーになっているって聞いてきたんですけど、僕はロリコンは外れちゃうし、留美子もそんなにやってい

た感じがしないんで、座談会のメンバーとしてどうなのかなと正直思っていたんですよ。

**沖** 緒方さんはロリコンではないですよ。

**毛羽毛** ないない。巨乳の方が好き。

**緒方** 巨乳もちがうと思うけど(苦笑)。留美子系でいうと、当時は真面目な研究誌みたいなものもすごく多くて、本当はそういう人たちが、ここに来て話してもらったほうがいいんじゃないのかなっていう気もするんですが。

**沖** ファンクラブ系の同人誌があれだけ大量に出たのは、『うる星』が最後じゃないですか。

**米沢** そうね。研究誌というか論評というか、そういうくりでは『エヴァ』までないね。緒方さんは、オリジナルはやらなかったんですか？

**緒方** 僕はアニメが好きで、同人誌というのは、アニメに触れるための手段だったんですよ。アニメを自分の解釈でいじって、それを人に観てもらおうところから、漫画を描いているので、高橋留美子だけどうこうというのはなかったです。ただ、たしかにあのころ高橋留美子っていうのは、すごく存在感が大きかったですよね、同人誌でもそうだし、アニメも漫画も。それで言うと、アニメも長期に続いたぶんだけ、色々遊びができたんで、そういうところにひかれて、結果随分描かせてもらったということはあるかもしれません。

**米沢** 毛羽毛君が高橋留美子にはまったっていうのは、それまでの少年漫画とはやっぱり違ったということ？

**毛羽毛** 違いますね。まず、女性が描いているっていうことがありますよね。女性の感性って、男とはやっぱり違うじゃないですか。例えば、ギャグに対する考え方も、まったく違うんですよ、シニカルっていうか。

**計奈** 私が高橋さんを知ったのは最初に言ったように同人誌なんですけど、やっぱりそういうシニカルなギャグにひかれましたね。

**計奈** 『うる星やつら』で、ラムちゃんが酔っぱらってセーラー服を脱ぐ話があるんですよ。脱ぐと、いつものピキニが出る。でも、まわりの男性は「おーっ」と沸くんですね。私も「おーっ」と思ったし。あの感覚が分かる女性がいたのか、というのは驚きでしたね。

**緒方** 僕、その話を20年前にも計奈さん本人から聞いてますよ(笑)。

**計奈** ははは。あれはトラウマですね。

## 用語解説

### ■リヒテルとかハイネルとか

「ダイモス」「ホルテスV」の美形悪役キャラ。詳しくは、他の作家座談会を参照。

### ■コンビネーション

合体同盟。詳しくは、一番最初の作家座談会を参照のこと。

### ■別コミ

「別冊少女コミック」。小学館発行の月刊少女まんが誌(70年創刊)で、現在の「Betsucomi」の前身。編集者の山本順也の先進的編集方針の下、萩尾望都、竹宮恵子、大島弓子、樹村みのりなどの「花の24年組」の主要な活動舞台のひとつとなった。当時の少女まんがファンの必読雑誌。

### ■エピカル

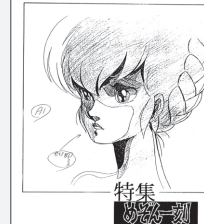
シベール以降、SFとギャグを入れた長編指向の「エピカル」(沖由佳雄、孤ノ間和歩、豊島ゆーさく、計奈恵、三鷹公一)、ヒロイックファンタジー指向の「アスケロン」(豊島ゆーさく、三鷹公一)、「TEKUNO・RORIA」(森野うさぎ)と一部重複しながら徐々に個別の活動に分かれていく。

### ■うる星

「うる星やつら」。高橋留美子の出世作で79年に連載開始(87年終了)。作者本人がある雑誌のインタビューで「SFとはきれいな半裸の姉ちゃんである」と答えたとおり、ヒロインのラムちゃんの無自覚な色気は他に類を見ないもので、留美子人気の大きな要因の1つである。81年～86年の長きにわたりTVアニメが放映される。アニメにおいて押井守を始め、多くのクリエイターが自分なりの解釈をした「うる星ワールド」を展開したことが、同人誌における活動を刺激することになった。



賢美飛見伝  
巻之弐



特集  
うる星

**沖** そのへんのキャラクターが男性にも受けたんですね。エロチックな女性が描ける女性というのは、それまでほとんど存在してなかった。

**安田** 本当にキャラクターが色気があるんですね。私はラムちゃんはもちろん好きなんですけど、お雪さんなんか、色気があるなあ、と。今の、ラムちゃんが酔っ払いで脱いだ場面で、確か女の子たちはみんな「馬鹿みたい」「いつもの格好じゃない」ってさめたセリフをいうんですね。私も、脱いだときには「うおーっ」って思ったけど、一方で同じようにつっこみが入ったから。

**毛羽毛** 漫才の掛け合いなんかに近いですね。もう1人冷静なやつがいて、その視点に立つから面白いっていう。

**米沢** そういう感覚は『1、2のアッホ!!』(コンタロウ)と『すすめ!!パイレーツ』(江口寿史)あたりから始まるんだけどね。流れとして、吾妻さんから高橋留美子への移り変わりみたいなのがあったと思うんだけど、それはどうかな。同じような資質の人間がはまっていたと思うんだけど。

**沖** うーん、内部にいと、そこらへんが見えてこなかったんですね。僕は吾妻先生のファンとしてアシスタントになったわけなんですけど、一番旬の時期を内部で過ごしてしまったので、ファンとしては損をしてる。先生の作品も仕事とみてしまうと、純粋に楽しめないんです。ただ、コミケで男性系が増えたのには『うる星やつら』は大きいでしょうね。

**毛羽毛** 後押しはしてるよね。

**米沢** ロリコンではここまでしかいかなかったのが、『うる星やつら』で増えた。

**沖** 『ミンキーモモ』とか色々あったんですけども、そこまでのブームにはならなかったから。あれだけたくさんのアニパロのサークルが出たというのは『うる星』からでしょう。

## アニパロとオリジナル

**米沢** 緒方さんは、最初にやったのはなんのパロディだったんですか。

**緒方** 『ゲッターロボ』のファンクラブで、オリジナルのゲッターロボを描きました。あの頃は本当にもうネタが

思いつけば片っ端から描いてましたから。漫画の体裁をなしてたのではRexで『ベルサイユのばら』を8ページ(笑)。

**毛羽毛** 緒方さんがすごいのは、原作の特徴をちゃんととらえているんですよ。でも、緒方さんの絵だって分かる。

**緒方** それは似てないってことでしょ?(笑) アニメーターってというのはそういうのを器用にやるじゃないですか。僕はアニメ業界に行きたいなって憧れた時期があったものですから、同人誌でそれに近いことがやれるといいなって思っているんですよ。

**計奈** ロリコン系のパロディって、なんか元の設定崩す人って多いじゃないですか。『めぞん(一刻)』でも、いきなりマスクした強姦魔が出てきてみたいなのが多かった。それって別に『めぞん』じゃなくてもいいわけでしょ。そういった中で、緒方さんの漫画って、ありそうなラインでHやりましたよね。それは当時からすごいなと思ってた。

**安田** 四谷さんがこういうことしているだろう、みたいな描写があったじゃないですか、あれはおかしかった。

**緒方** 今皆さんにそういうこといっていただいて、当時の苦労が報われたなー、と思います。

**一同** (笑)

**米沢** 毛羽毛くんは、パロディは?

**毛羽毛** ほとんどないんですよ。やっぱり頭でグルグル想像していて、それを漫画にするから面白いんです。パロディってというのは結局人の土俵のうえでやっているような気がして、その束縛が嫌なんですよ。

**沖** 千之ナイフさんの「人形姫」(サーカス・マッドカプセル)とは時期的には重なってるんだけど、ほとんど接点はなかったよね?

**計奈** こちらとはまったく別方向だったと思うんですよ。

向こうは、人形の美学とエロチズシムでしょう。

**安田** 本の造りが美しかったですよ。

**毛羽毛** 帯まで作ってる同人誌なんて初めて見た。

**安田** ああいう作りを耽美系の同人誌以外で見たのはあれぐらいでした。

**米沢** そういうこと言うと、「シベール」に比べれば「エピカル」はずいぶん装丁がよくなったよね。

**計奈** ただ、「シベール」の(表紙の)黒の個性に比べて、普通に戻っちゃったと思うんですよ。普通のオフセット誌の、漫画が増えただけっていう本になった。で、悲しいかな、エロを抜かしてやってみると、やってる方向がバラ

バラなのが分かってしまった。可愛い女の子とエッチする本というので、みんな集まれ、ってやって。じゃあ、そろそろそれを卒業して普通にやってみようかってやってみたら、ばらけちゃったという。結構情けない話ですよ。

**毛羽毛** でも、これだけの影響をのちに残しているんだから、立派だよ。

**米沢** 安田さんは、女の子でH漫画を描いたのはしりになるんだけど、他に仲間っていたの?

**安田** 描いてる人はみんな会員だったから、それが仲間でした。ただ、やっぱりみんなバラバラなんですよ。同じロリでも、お人形趣味の人もいるし、百合の人もいる。ただ、それを一冊に無理矢理まとめるのが楽しいと思ってやりました。当時はそういうサークルは1つもなかったんですよ。だから、女性がやってて、しかも結構バラエティに富んでいるっていうので、みんな面白がってくれて。

**米沢** その後、男性系が増えていくわけですけど、毛羽毛くんなんかは創作系だったわけだね。

**毛羽毛** 「姫麟クラブ」は男性系行ったり、創作系行ったり、色々してるんですよ。それぞれ読者層が違っていて面白いですね。創作系の読者は素直なんだけど、男性系どうちのは食い足りないっていう人が多いみたい(苦笑)。

**米沢** 最初から「百物語」なの?

**毛羽毛** そうです。僕はそのために立ち上げましたから。相方の松田(紘佳)は「黒の炎」を終わらせるために……って、向こうはもう終わっちゃいましたけど(苦笑)。

**緒方** 僕もオリジナルをやりたいとは思うんですけど、パロディの方が今は好きなので……。

## 原稿依頼と本の交換

**米沢** 緒方さんと「なつずいせん」が伝説的な本でしたよね。あれは何年?

**緒方** (メモを見ながら)84年の12月のコミケのときに出してますね。1984年の夏に「スタリオン」を出して……。当時、自分の周りで上手い描き手ってみんな女性で、でも、そういう人が今でいう成年向けを描いてくれたら、また違った本ができるかな、そういうのが1冊に集まったら、すごくいいな、というのがあったんですね。それが「スタリオン」。

### 用語解説

#### ■ 1、2のアッホ!!

「週刊少年ジャンプ」で75年から連載開始。

#### ■ すすめ!!パイレーツ

「週刊少年ジャンプ」で77年から連載開始。

いわゆる「スポ根もの」が、「人生とは?」「野球とは?」と大上段に振りかざした求道的要素が強いのに対し、こうした世界をパロディの対象にしたのが、この2作に共通する。登場人物は遊びの合間に人生をやって、その片手間に野球を行っている。このような作品が人気を得たのは、作者と読者の人生観がそれまでとは大きく異なってきたことの反映と言えるだろう。

#### ■ ミンキーモモ

「魔法のプリンセス ミンキーモモ」。82年3月~83年5月まで放映されたTVアニメ。それまでは、「ひみつのアッコちゃん」「魔女っ子メグちゃん」「花の子ルンルン」といった東映系の魔法少女モノが、一部の強力な男性ファンの支持を得てきていたが、この作品から一気に男性ファンの裾野が広がった。彼らのテンションは変身して、少女が大人になると一気に下がる。煩惱の有り様は、男女・時代を問わず似たようなものである。なお、ここでの「ミンキーモモ」とは、当然ながら俗に言う「空モモ」のこと。91年10月~92年12月まで、同タイトルでいわゆる「海モモ」と呼ばれる新作も作られている。

#### ■ ゲッターロボ

74年4月~75年5月放送の永井豪・石川賢とダイナミック・プロ原作のTVアニメ。合体スーパーロボットアニメの元祖。

#### ■ ベルサイユのばら

池田理代子作。72年より「週刊マーガレット」にて連載開始。74年宝塚歌劇で舞台化され、空前のブームを引き起こす。TVアニメは79年10月~80年9月放映。

#### ■ めぞん(一刻)

高橋留美子作。80年~87年「ビッグコミックスピリッツ」連載。TVアニメは86年3月~88年3月放映。ファンに不評の実写映画は86年公開(澤井信一郎監督)。「うる星」があたるとラムの永遠の追いかけてこであったのに対し、この作品では、五代と響子の出会いから紆余曲折を経て結ばれるまでを描ききった。

#### ■ 四谷さん

「めぞん一刻」の主人公達が暮らす下宿館のあからさまに謎な住人。読者としてはあれこれ想像せずにはいられないようになっている。アニメの声優は千葉繁、実写映画では、伊武雅刀が演じている。

#### ■ 千之ナイフ

モデルの山口小夜子を理想とする、おかつ頭の美少女で有名。スタイリッシュな画風でホラーまんがとギャグマンガを得意とする。

#### ■ 百物語

「百物語by.Y.O.K.O.」。毛羽毛現さんのライフワークのシリーズ。ラポートからも単行本が2冊刊行された。

**毛羽毛** お互いに原稿を依頼したり、依頼されたりっていうのは、そのころからずいぶん増えてきましたよね。

**米沢** この座談会のメンバーは、お互いに描き合ったり、お願いしたことが大体ある人たちですよ。

**計奈** そうですね。僕が作った「ずっきゅん★マガジン」って、僕が見たい同人誌を作るために依頼したんですよ。だから、自分の絵は載せてない(笑)。知り合いからは「バカ野郎」って言われましたけど。

**沖** コミケが何万サークルもあっても、自分の好みの理想的な本っていうのはなかなかないですよ。だったら、自分で作ってしまえ、というのは基本ですよ。

**計奈** 依頼と言えば、変わったなと思ったのは、原稿料のことなんですよ。依頼すると「いくらですか」って聞き返されたり、逆に声をかけてもらったときに「計奈さんだったら、これほど払えばいいんですか」って感じて依頼がくるのがあって。

**米沢** いつくらいから、そういうのが見え始めました？

**計奈** 目立つのはギャルゲーの同人誌の始まったころかな。以前、『クリイミーマミ』でもそういうことはありましたけど。最近は、「本の交換はしてません」って断るサークルも出てきて……。そういう意味で言うと、今の同人誌っていうのは、資本主義というか、商業誌ごっこだよね。

**沖** まあ、少なくとも額のお金が動くから、どうしてもそういう人間っていうのは出てくるでしょう。

**緒方** 「(交換はせず)本を買って下さい」って遣り取りをしたこともあります。僕の場合は、知りあったばかりの頃の炬燵屋のたつねこさんなんです。僕はもう、もらってもらうつもりでいたんですけども、たつねこさんが御自分の本を作った時に「お金払わせてください。その代わりに、僕の本もお金払って買ってもらえますか」という言い方をなさったんです。こちらが分厚い本をだしても、たつねこさんが薄い本を作っていた場合にそれぞれの頒価を払いあうことでもって、金銭的な不釣合いを解消させてほしいという意味だと、解釈しています。自分んの作った本に対するたつねこさんの真摯な姿勢は目から鱗でした。だから、決して悪いことではないんじゃないでしょうか。今では僕の方が薄い本ばかり続いていてみなさんと交換する時は肩身が狭いですが。

**計奈** そういうのもあるでしょうけど。ただ、私の場合、コピー本と自分のオフ本をよく交換するんですよ。次

はオフで出してくれよ、という圧力のつもりで(笑)。

**緒方** そういうのがプレッシャーになってつぶれる人もいますから、やめてくださいよ(苦笑)。お互い同人誌が好きということで、僕も最初のうちは描いたり描かれたりってことでやってましたけれども、みんな学生ではなくなって生活がかかってくるようになってくると、頼みにくくなるという部分もありますよね。年齢をとると。

**一同** (苦笑)

## コミケの ちょっと変わった人たち

**米沢** ちょっと昔の即売会の雰囲気みたいなものについても喋ってもらいたいんだけど。

**沖** 市民プラザが一番雰囲気は良かったと思いますね。落ち着いた感じがあって。

**毛羽毛** 会場まで斜めに坂があって、楽しかったよね。

**沖** 上から太陽光が降り注いできたり。

**米沢** プールがあって、女の子たちが泳いでるし。シベールの方々が見てたって聞いているよ。

**沖** えっ、知らない。

**計奈** あ、覚えてますよ。ちょうど外側を向いて配置されていたんです。ガラスの向こうに、プールの壁面が見えていて、女の子が歩いていくと「おーっ」って。

**沖** そうなんだ。

**計奈** こんなこともありましたよ。「シベール」を売り切った後に、午後2時頃から「アニベール」っていうコピー本をちょっとだけ売ってたんですよ。で、それが売り切れたあとにガラスの向こうを見ると、うずくまって肩を震わせているお兄さんがいるんです。どうしたのかと思ったら、「友達に頼まれたんだけど、買いそびれてしまって」って、泣いているんですね。それでコピーを失敗したものをあげたことがある。

**米沢** あの頃から、変な人も増えてきたのかな。

**計奈** 私はね、逆にそういう「電波系」が今は少なくなっただけで寂しいですね。『クリイミーマミ』の同人誌を出したときなんだけど、(制作元の)びえろで『マミ』の漫画の仕事もしていたんですよ。そうしたら、びえろ宛に「こいつはマミのHな本も出していて、親の仇にも匹敵するヤツです」ってクレームの手紙をいただいたことがあるんです。

それを聞いて、びえろの方をお願いして、その方に返事を出したんですよ。「私の本は、売らんかな主義のHじゃなくて、愛の結晶なんだ」と書いて。しばらくしたら、その人がビール券と庭に生えたびわの実を送ってきた。「あなたは違った」って。

**一同** (爆笑)

**計奈** シベールを売ってるときも、集団で立ち読みしている向こうで、1人だけ離れて眺めている人がいるんですよ。で、周りに人がいなくなると、その人が突然現れて、中身も見ないで、お金を置いて帰っていくんですよ。

**米沢** エロ本を買う感覚だなあ。

**計奈** こっちは、そういうのを見て、「仲間♥」と思ってた。

**緒方** こっちは、そういう計奈さんを後ろで見てて、「ああ、計奈さん、今幸せそうだ」って思ってた(笑)。

**計奈** 僕にとっては同志をみつめる気持ちでした。今、そういう電波が通じる人が少ないんですよ。

**毛羽毛** ああ、あなたも出しているんだ、電波。

**計奈** そう。

**一同** (笑)

**米沢** 毛羽毛くんなんかは、オリジナルっていう形でやっていたんだけど、読者は、アニパロ系とは違うのかな。

**毛羽毛** どうなんだろう。創作だとゼロから読者層を構築して行って、来る人はずっときてくれるっていう楽しさがありますね。パロディ系ではそういう定着っていうのはないでしょう。いつも買いに来てくれるのでなじみになっちゃって、「いつもありがとう」とかそういう会話ができたりしてね。

**沖** 我々ベテランサークルはそういう客層がほとんどですよ。

**毛羽毛** 新しい人もいるんだけど、あ、みたことあるって人の方が多い。

**沖** まあ、新しい世代はビジュアル重視なんで、我々もうつらい時代に……。笑)。毛羽毛くんもずっと、シリーズものなんで、いきなりくと設定が分からないということもあるから、買うのは同じ人になってくるんじゃない？

**毛羽毛** でも、頭から全部買っていきっていうすごい人もいますよ。

**米沢** 今何話目までいってるの？

**毛羽毛** ちょうど3分の1ですね。死ぬまでに終わるのかな(笑)。

### 用語解説

#### ■「なつずいせん」が伝説的な本

五代と響子がはじめて結ばれる場面を描いた、緒方賢美作「めぞん一刻＝扉のむこう＝」を掲載。これまでの男性作家によるパロディは原典に対する批評またはお遊びと言う傾向のものがほとんどであった。原典において2人が肉体的に結ばれることは予感させながらじらされる状況が続いているのに対し、本作では2人が結ばれるエピソードを、同じ下宿に住む少年の視点から描き、完成度の高いパラレルストーリーとして成立している。キャラが違ってもやっていることは同じという作品がほとんどだった中で新たな可能性を示した作品だったのである。

#### ■クリイミーマミ

83年7月～84年6月放映の「魔法の天使クリイミーマミ」。スタジオぴえろ制作。この作品も多くの男性向同人誌にネタを提供した。例えば、同時期に流行った「重戦機エルガイム」とネタを掛け合わせた「U-GAIM」は、園田健一による「うる星やつら」パロディ「ラムロイド」とともに、戦闘メカ美少女の先駆的存在である。

#### ■レモンピール

世界初(笑)のロリコンコミック誌。発行日は1982年2月1日となっているが、実際の発売日は81年末。表紙にロリコンとはっきり書かれているが、吾妻ひでお、内山亜紀、千之ナイフ以外は果たしてロリコンと呼んでよいかはかなり微妙であった。その後、阿乱壺や孤ノ間和歩を始めとする同人誌出身の作家を起用して体裁が整う。今回の作家座談会参加メンバーにも複数名執筆者がいる。98年休刊。

#### ■高屋(良樹)

同人誌と「レモンピール」で連載した「冥王計画ゼオライマー」はちみもりお名義。「強殖装甲ガイバー」では少年まんがに劇画のタッチを取り入れた画風になったが、ちみもりを時代は少年まんがと少女まんがとアニメの絵柄を巧みにミックスさせた新しい時代の先駆けとなる画風であった。

#### ■森野(うさぎ)

「シベール」以降、すたじおBAKI、STUDIO AWAKE、SISTEMY GIZZYと精力的にサークル活動を行う。男性系大手サークルとしての人気の長さは特筆。影夢優名義の「遊裸戯」シリーズで作家としても高い評価を得た。



## コミケット今昔

**米沢** 緒方さんは、「スタリオン」なんかで、列ができたっという感じが記憶にあるんだけど。

**緒方** 僕はあんまり覚えてないんです、そのへんは。

**安田** 「なつずいせん」はものすごく手に入れづらかったですよ。

**毛羽毛** たしか、あのときって、汗だらだら流しながらやってたよ。

**米沢** 人氣が爆発した、みたいな感じはあった？

**緒方** いや、そういう感じはないですね。確か、自分が描くのが遅くて発行が遅れてたんですよ。だから、早くみんなに完成した本をお渡ししてお礼をいわなくちゃいけないっていうことにだけ頭がいてましたから。とにかくまず発行しなくっちゃと。

**米沢** 何部くらい刷ったんです？

**緒方** 1000はないと思います。

**米沢** シベールで一番出したときで、500部だったかな。再版はしてないよね。

**沖** してませんね。売りきりが原則だったから。

**米沢** 「なつずいせん」が出た前後からだと思うんですよ、ハードコア的な描写が増えてきのは。

**沖** あのときって、その前のロリコンブームの反動みたいなのはあったでしょうね。

**米沢** 「時代変わったな」みたいなことは思わなかった？

**計奈** あのころ、好きで描いているっていうより、名をあげようという人も出始めてきたんですよ。有名なサークルから依頼されて名を挙げたい、みたいな。

**米沢** 安田さんなんか、そのころから依頼が入り始めてますよね。

**安田** 女の子が美少女書いているのってあんまりいなかったから、とりあえず、面白そうだからって声がかかったんでしょうね。こちらとしてはでも、名をあげようというより、描きたいけれどそんなに自分で本をどんどん出せるほど余裕なかったし、自分が原稿さえ描けば、そのあと本になって返ってきて、なんて楽チンなんだろうというのが大きかった(笑)。

**計奈** そういうポリシーの人も多いでしょうけど、ブーム

によって名をあげるようとするパターンも目立つようになってきて、僕自身はちょっと嫌な感じはしてましたね。

**米沢** それはやっぱり『うる星』以降？

**計奈** そうですね。

**毛羽毛** 編集だけやってるという人も増えてきたからね。

**計奈** コミケが終わって、「次のコミケは何がくるかね」という話が聞こえてくるようになったのも、あのころだし。そういうもんじゃないだろうと言いたい。

**毛羽毛** ……なんか「最近の若い者は」という会話になってるね。

**一同** (笑)

## 商業誌と同人誌

**米沢** 商業誌との関係についても話を訊いておきたいんだけど。80年秋に「レモンピール」を出したいという話があって。その後も色々出てきたでしょう。あれが、同人誌のものが商業誌になるはしりだったわけですけど。

**沖** 我々もそこらへんに巻き込まれて……。

**計奈** いや、巻き込まれたというか、こちらも飛びついたでしょう。一応、まがりなりにもプロを目指している人間が揃ってますから、描いた同人誌と同じラインで、商業誌に描けるっていうのはいいチャンスでしたからね。

**沖** 中でも高屋(良樹)さんと森野(うさぎ)さんは、オリジナル志向が強かったんじゃないかなあ。

**米沢** 毛羽毛くんも単行本出したりして、プロということは考えなかったの。

**毛羽毛** 実際、揺れてはいたんですけどね。ただ、プロになると、飯を食うために描くことになるじゃないですか。それで自分の理想のものを描ける人もいるとは思いますが、僕はそこまで器用じゃないので。

**米沢** 沖君なんかは、やっぱりプロの漫画家ってことで。

**沖** うーん、でも、あまり長続きしなかったですね。結局、ライターになっちゃって。今は、漫画は同人誌がメインですね。

**米沢** 計奈くんは、そのへん色々やってきましたよね。

**計奈** 商業誌の場合は、キャラクターの説明があって、出会いがあって、アクションがあってという順番がありますよね。それ考えるのは楽しみでもあるんだけど、重い作業

でもあるんですよ。同人誌だと、その部分をすっ飛ばして、好きな部分だけ描ける。僕が漫画を描いていて一番面白いところは、自分の好きなキャラクターを動かせるところだから、それだけに徹することができるのがいいですね。で、同好の士がいればそれでOKだと思ってる。

**米沢** 緒方さんも商業誌にイラストを描いてますよね。

**緒方** 声をかけてもらってありがたいことですよ。ただ、当時プロでやってみたいという気持ちもありましたけど、やっぱりプロでは務まらないというのが、最近分かるようになりました。田舎の子供だったので、業界に対するあこがれというのは強いんですけど、即売会なんかを通じて、もっと上手い人とか前向きな人に接するじゃないですか。そうすると僕はまだまだ足りないな、と思うんですよ。ただ、自分で頑張れる方向というのはあるでしょう。だったら、生業にしなくても同人誌の場っていうのがあるから、それで自分のやりたいことはここでやらせてもらって、仕事は別にやっても出来るんじゃないかなっていう風に分かれてきましたね。

**米沢** 安田さんも商業誌で描いた時期もあったよね。

**安田** うーん。やっぱり、心構えができてなかったんですよ。商業誌に載ってしまったことで幸せ、という状態になってしまって。その先を考えて、ずっと描き続けていきたいと思うのがプロだとしたら、そういう意味でプロにはなれなかった。漫画自体は好きだから、同人誌だけはちょこちょこ描いていこう、と。

## 四半世紀を振り返って

**米沢** 長時間ありがとうございました。もう店を追い出されそうなので、最後に、おおざっぱな質問ですけど、自分にとって漫画とは——あるいは同人誌でもコミケットでもいいんですが——何かということについて一言もらえますか。

**沖** コミケも、もう四半世紀も参加していると生活の一部になっちゃってますよね。だから、何かと訊かれても困りますね。

**一同** (笑)

**米沢** 他のイベントには参加してるんですか？

**沖** 月1ぐらいは出てるかな。やっぱり即売会は楽しいですね。コミケはやっぱり真剣勝負なんですよ。それに

比べて、小さいオンリーなんかだと本当に気楽に参加できます。

**計奈** 漫画を描くには締め切りが必要なんですよ、その締め切りの始まりがコミケットなんで、コミケットを中心に漫画を描いている感じが強いんです。その意味では私にとっては「基本」かな。

**毛羽毛** 「コミケットは自己表現の場」という言葉がありますが、僕にとってはまさにそうですね。コミケットがあったから漫画を描いていられたし、友人もできた。この感覚は、昨日今日参加した人には分からないかもしれないけど。

**米沢** そうか、ここに参加している人は、みなさん四半世紀以上関わってるんだ。

**緒方** 気がつけば、僕も自分の年齢の半分以上は、同人誌に関わってます。その時その時は目の前の同人誌づくりに夢中なんですけど、振り返ってみると、残してきたものに色々と思入れもあるし、色んなことを教わった場だと思います。まさか、こんなところにお呼ばれて、こんな昔の話をするなんてこと考えてなかったし。コミケットに限らず同人誌即売会にはすごくありがたい場所を提供していただいで感謝してます。優等生的な言い方で申し訳ないんですが(笑)。

**安田** コミケって本当に毎回毎回、必ず、何か刺激的なことがありますよね。「あ、こんな話がある」とか「こんな同人誌もあるんだ」みたいな。2回目から懲りずに来てても、それが毎回必ずあるっていうのが抜けられない理由ですよ。

**米沢** 皆さん、どうもありがとうございました。

聞き手・米沢嘉博(コミケット準備会)

オブザーバー参加・安田かや(コミケット準備会)

